

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (31)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

長浜金久遺跡

1984年3月

鹿児島県教育委員会

は じ め に

この報告書は、鹿児島県教育委員会が昭和58年度に発掘調査した新奄美空港建設地に所在する「長浜金久遺跡」発掘調査の記録であります。

本遺跡は砂丘に残されたもので、調査の結果縄文時代の貝塚や住居跡・炉跡等の遺構とその時代の人々が使用した土器及び古墳時代から奈良時代のものと見られる釣針や鉄鏃等の鉄製品を発見するなど、奄美諸島の文化史研究の上で貴重な資料を得ることができました。

その後、記録や遺物の整理も進み、ここに調査報告書刊行の運びとなりました。

この書を郷土史の研究、文化財の保護及びその思想の普及のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に終始御尽力くださった県土木部空港対策室、大島支庁港湾課、笠利町教育委員会並びに地元の方々に厚く感謝申し上げます。

昭和59年3月

鹿児島県教育委員会
教育長 井之口 恒 雄

例 言

1. この報告書は新奄美空港建設に伴う長浜金久遺跡の発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は鹿児島県土木部空港対策室の依頼で鹿児島県教育委員会が行った。
3. 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
4. 実測、トレース、挿図、図版作成は弥栄・長野が行ない、写真撮影、編集は弥栄が行った。なお執筆分担は次のとおりである。
第Ⅰ・Ⅱ章、第Ⅲ章第2節、第Ⅳ章……………弥栄久志
第Ⅲ章第1節……………長野真一

目 次

第1章 調査の経過	5
第1節 調査に至るまでの経過	5
第2節 調査の経過と組織	5
1. 調査の組織	5
2. 調査の経過	5
第II章 遺跡の立地と環境	6
第III章 遺跡の概要	9
第1節 長浜金久第I貝塚の概要	9
1. 貝塚の概要	9
2. 出土遺物	13
1) 土器・石器	13
2) 貝加工品	17
3) 鉄製品	19
第2節 長浜金久第II貝塚の概要	20
1. 貝塚の概要	20
2. 遺構	20
3. 出土遺物	25
1) 土器	25
2) 石器	25
3) 貝加工品・骨角器	26
第IV章 小結	37

挿 図 目 次

第1図	長浜金久遺跡の位置と周辺遺跡……………	7
第2図	長浜金久遺跡の地形と調査地区……………	8
第3図	長浜金久第Ⅰ貝塚の土層……………	10
第4図	長浜金久第Ⅰ貝塚の全体図……………	付図1
第5図	長浜金久第Ⅰ貝塚の出土状況図(1)……………	付図2
第6図	長浜金久第Ⅰ貝塚の出土状況図(2)……………	付図3
第7図	長浜金久第Ⅰ貝塚の出土状況図(3)……………	付図4
第8図	長浜金久第Ⅰ貝塚の出土状況図(4)……………	付図5
第9図	長浜金久第Ⅰ貝塚の土器1……………	14
第10図	長浜金久第Ⅰ貝塚の土器2……………	15
第11図	長浜金久第Ⅰ貝塚の土器3……………	16
第12図	長浜金久第Ⅰ貝塚の貝札実測図片……………	17
第13図	長浜金久第Ⅰ貝塚の貝製品……………	18
第14図	長浜金久第Ⅰ貝塚の鉄製品……………	19
第15図	長浜金久第Ⅱ貝塚の遺構と砂丘形式……………	21
第16図	長浜金久第Ⅱ貝塚土層……………	22
第17図	土壇B(C砂丘)……………	23
第18図	住居址・炉址・土壇A……………	24
第19図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅰ類・Ⅱ類a……………	27
第20図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類b……………	28
第21図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類b……………	29
第22図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類c……………	30
第23図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類c……………	31
第24図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類c……………	32
第25図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類d・e・f……………	33
第26図	長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅵ類……………	34
第27図	長浜金久第Ⅱ貝塚・底部……………	35
第28図	長浜金久第Ⅱ貝塚・貝製品・骨製品・石器……………	36

図 版 目 次

図版 1	長浜金久遺跡の全景	9
図版 2	長浜金久第 I 貝塚の概要	11
図版 3	長浜金久第 I 貝塚の概要	11
図版 4	長浜金久第 I 貝塚	11
図版 5	長浜金久第 I 貝塚	11
図版 6	長浜金久第 I 貝塚	12
図版 7	長浜金久第 I 貝塚	12
図版 8	長浜金久第 I 貝塚	12
図版 9	長浜金久第 I 貝塚	12
図版10	長浜金久第 I 貝塚の土器	13
図版11	長浜金久第 I 貝塚の土器	13
図版12	長浜金久第 I 貝塚の貝玉	17
図版13	長浜金久第 I 貝塚の貝札	17
図版14	長浜金久第 I 貝塚のボラ貝容器	17
図版15	長浜金久第 I 貝塚の貝匙	18
図版16	長浜金久第 I 貝塚の貝斧	18
図版17	長浜金久第 I 貝塚の貝匙	18
図版18	長浜金久第 I 貝塚の有孔貝	18
図版19	長浜金久第 I 貝塚の鉄製品	19
図版20	長浜金久第 II 貝塚の出土状況	38
図版21	長浜金久第 II 貝塚の住居跡・土壇・炉跡	39
図版22	長浜金久第 II 貝塚 I 類 a・b	40
図版23	長浜金久第 II 貝塚 I 類 b・c	41
図版24	長浜金久第 II 貝塚 I 類 e・f・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅵ類	42
図版25	長浜金久第 II 貝塚出土の貝製品	43
図版26	長浜金久第 II 貝塚出土の貝製品	44
図版27	長浜金久第 II 貝塚出土の骨製品・石製品	45

表 目 次

第 1 表	長浜第 II 貝塚出土の遺物分類表	26
-------	-------------------	----

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は大島郡笠利町万屋に新奄美空港の建設を計画し、その建設用地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することから、県土木部空港対策室からその取り扱いについて県教育委員会文化課に協議があった。文化課は昭和58年1月24日から2月12日まで確認調査を実施し、長浜金久遺跡の所在が2ヵ所で確認された。その第1地点は海岸側の砂丘で、第2地点は山手側の砂丘地であった。

海岸側の砂丘地の第1地点は試掘時点ですでに大半が砂取りされていたが、砂丘の中央部から海側の部分が残存していた。試掘調査では貝殻、土器、鉄器等が出土し、1600㎡以内の遺跡であることが推定された。

第Ⅱ地点は山手側の砂丘地にあり、縄文時代後期相当で約600㎡以上の面積をもち竪穴住居跡や人骨が検出した遺跡であった。

第 2 節 調査の組織と経過

1. 調査の組織

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県教育委員会文化課	課長	猿渡侯昭
	〃	課長補佐	本田武郎
	〃	主幹	中村文夫
調査企画	〃	主任文化 研究員	諏訪昭千代
調査者	〃	主事	弥栄久志 長野真一（2次）
	〃		青崎和憲・堂込秀人（1次）
事務担当	〃	管理係長	寺園 晃
	〃	〃 主査	安藤幸次

2. 調査の経過

昭和58年10月5・6日、県土木部空港対策室、大島支庁港湾課と現地打ち合せを行ない、同年10月11日から12月26日まで発掘調査を行った。

長浜金久Ⅰ地点は10月12日から前回確認した約1600㎡の発掘調査に着手した。その結果1600㎡以上に遺跡が広がることが確認された。遺跡の範囲拡大の理由は砂丘遺跡であるため2㎡の試掘溝では限界があったと考えられる。この拡張部は次年次に調査する計画である。

長浜金久Ⅱ地点は11月2日より開始した。長浜金久Ⅱ地点の確認範囲は約600㎡の遺跡であった。空港出口の通路部分55㎡の発掘調査を行ったが、砂取りされた畑の部分にも若干残っており最終的には160㎡になった。

なお発掘調査後2つの地点は貝塚の性格を持っていたのでⅠ地点を長浜金久第Ⅰ貝塚、Ⅱ地点を長浜金久第Ⅱ貝塚に変更した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境

長浜金久遺跡は鹿児島県大島郡笠利町万屋長浜金久に所在する。奄美大島は鹿児島島の南約 400kmの洋上にある島で南西諸島の中の奄美諸島に属する。その奄美諸島は大きく分けて喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島からなり、奄美大島はその中で最も大きい島である。奄美大島は北部に平地が多く、南部は山がちで湯湾岳の標高 694m の山を最高峰として、標高 400m～500m 級の山々が連なっている。

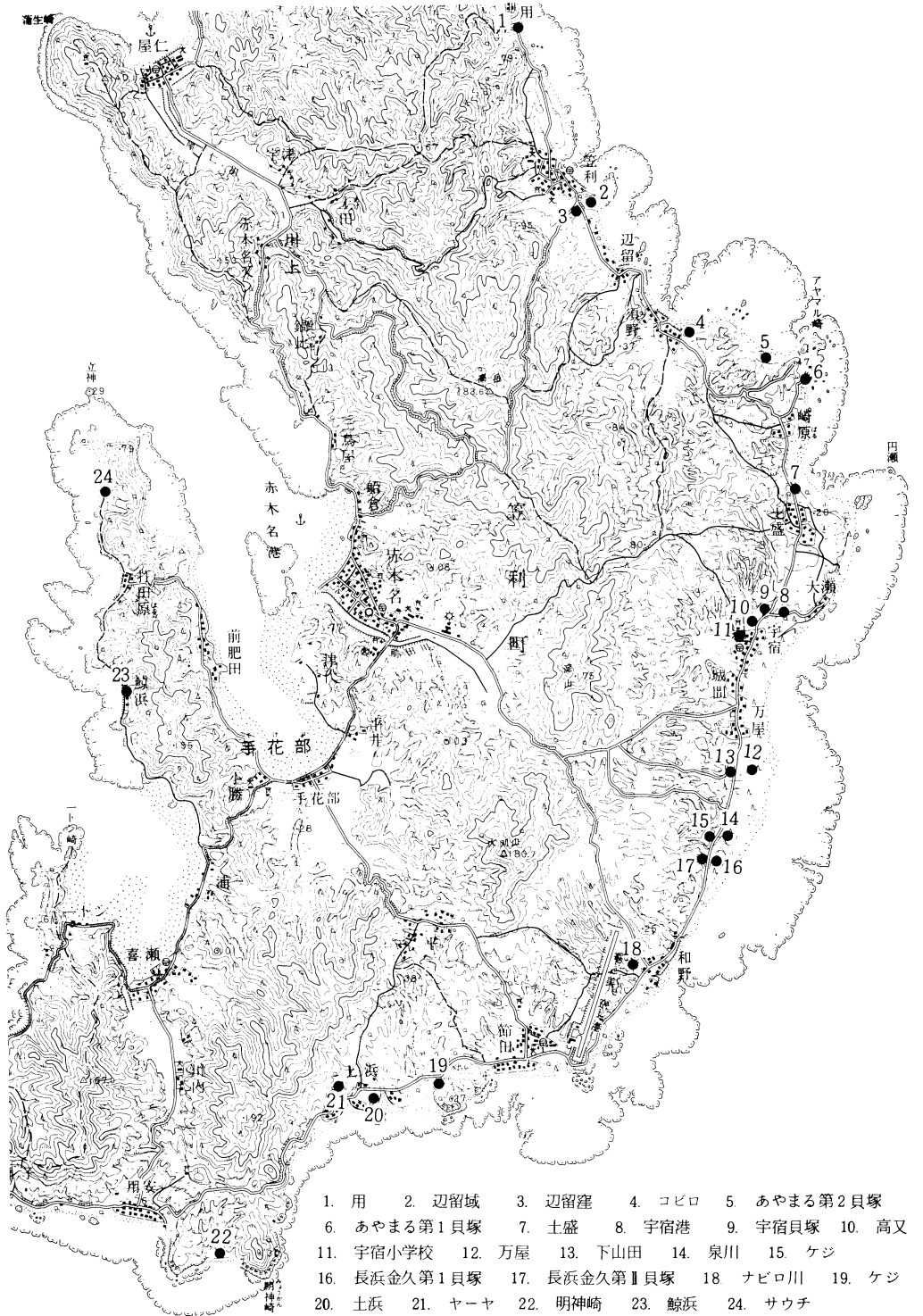
長浜金久遺跡のある笠利町は奄美大島の中では北部に位置する。また、この地域は南北約 15km、東西約4.5kmの細長い半島である。

地形を見ると標高約 150m の淀山や高岳等が南北に連なり、西側や北側は海岸まで山麓が延びている。この西・北海岸はリアス式海岸の様相を示し、赤木名湾、喜瀬湾等がある。集落としては赤木名をはじめ、喜瀬、屋仁、佐仁等がみられる。

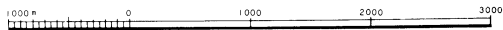
なお、赤木名は藩制時代の代官所が置かれたところで現在も行政の中心地である。

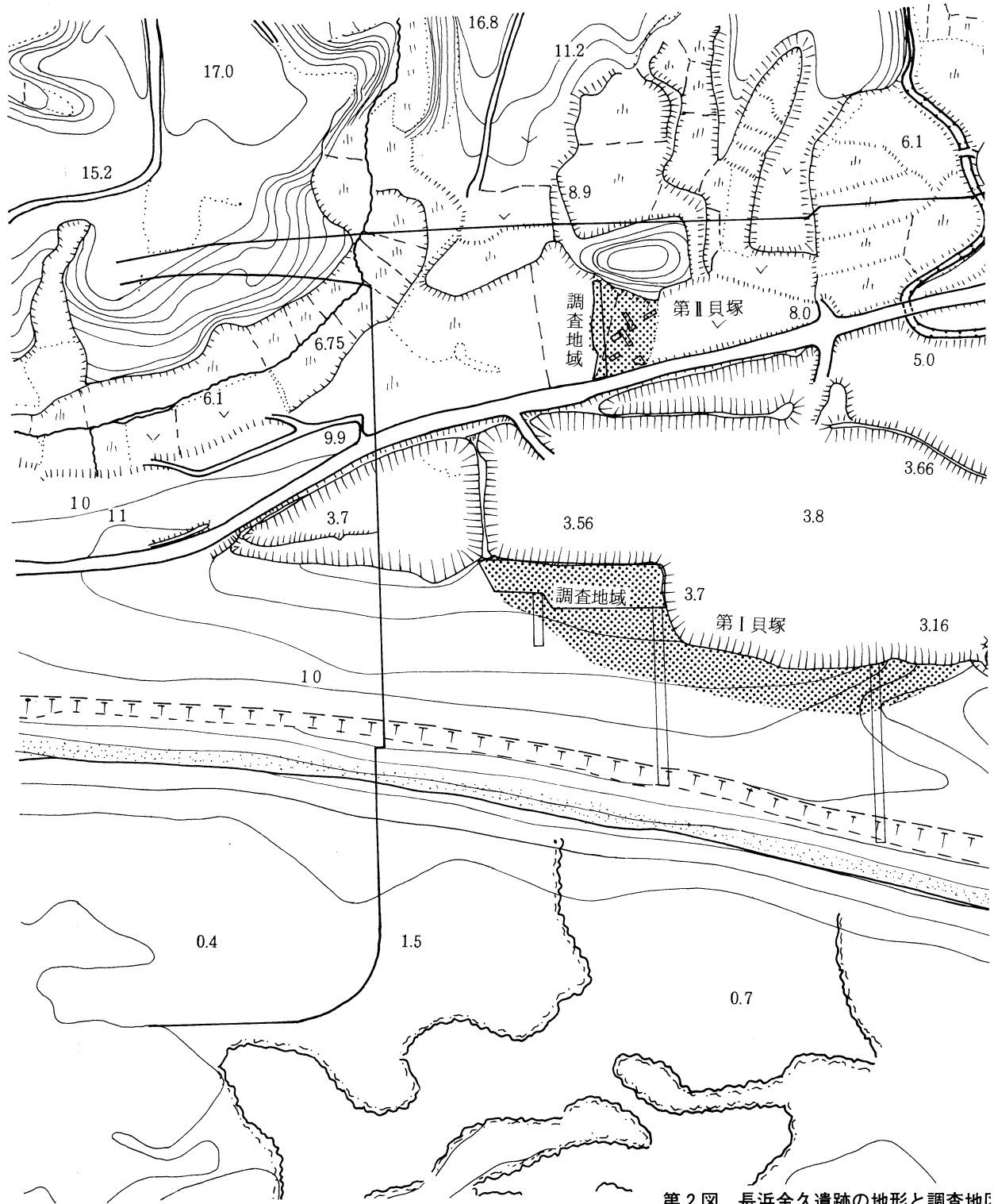
東海岸は大平洋に面し、用、笠利、宇宿、万屋、和野、節田、用安等の集落がみられる、東海岸は砂丘が発達し、とくに宇宿、城間、万屋、和野の間は発達が大きい。また、この地域は後に平地をかえ、遺跡も多く宇宿貝塚、宇宿港遺跡、万屋下山田遺跡、ケジ遺跡等が知られている。長浜金久遺跡は万屋と和野の間の砂丘上にある。

長浜金久遺跡の地形は後背地標高15m～50m の丘陵の前面に砂丘が発達し、海に約 250m 進んでいる状態である。万屋と和野の間には5本の小河川が流れ、その中でも長浜金久と泉川の間を流れる小河川が形成した砂丘に遺跡が立地している。この砂丘は堆積岩が風化した赤土の上に旧砂丘が形成され一部にはクール（砂が固ったもの）もみられる。地形上からみると砂丘の形成は第1段階が、海岸線が現在の県道位まで、川は逆L字状に曲がり海へ注ぐ。対岸の砂丘（北側）も形成され現在の県道よりも若干東側（海より）にあたると考えられる。その砂丘の発達は約30m位であろう。次の第2段階は砂丘が若干北へ延び海岸へ約 150m 発達し川はL字に曲り砂丘の頭をおさえるように海へ流れこんでいる。次の第3段階は大きく、砂丘が北へ延び川はL字になり、北へ約 150m 発達して頭をおさえるように曲って海へ流れる。ここでは別の北側の川も合流し、現在の河口となっている。対岸の砂丘も同じように発達し南側へ進んでいるが比較的新しい時期に形成されたものとみられる。第1段階の砂丘上には縄文後期相当の遺跡が数ヶ所みられる。長浜金久第Ⅱ貝塚やケジ遺跡、万屋下山田遺跡、宇宿貝塚等がこの線上に並ぶ。第2段階としては長浜金久第Ⅰ貝塚、泉川遺跡等がある。更に、第3段階の遺跡は見あたらない。

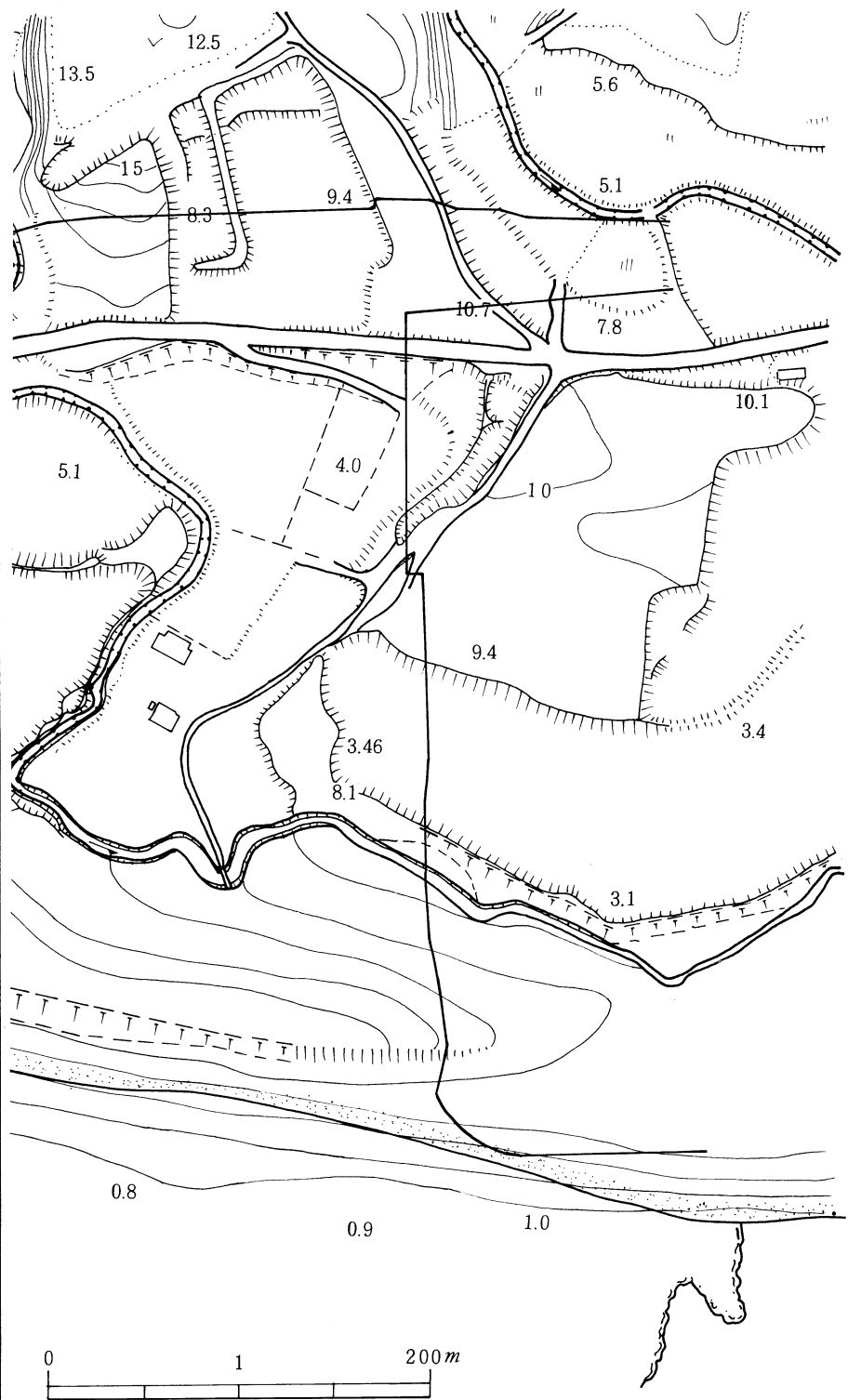


第1図 長浜金久遺跡の位置と周辺遺跡





第2図 長浜金久遺跡の地形と調査地



第三章 遺跡の概要

第1節 長浜金久第I貝塚の概要

1. 貝塚の概要

本貝塚は、砂丘に形成された南島に比較的多い³砂丘遺跡、である。

貝塚が残在する砂丘は、海岸線と平行してほぼ南北に走り、その距離は1kmに達し、また、浜の堤防状の役をなし、ベルト状に形成されている。今回調査した砂丘は標高12mから13mで遺物包含は、砂丘表面から浅い所で約1m、深い所では約5mに達し、海拔高にすると7m～12mの位置で確認している。

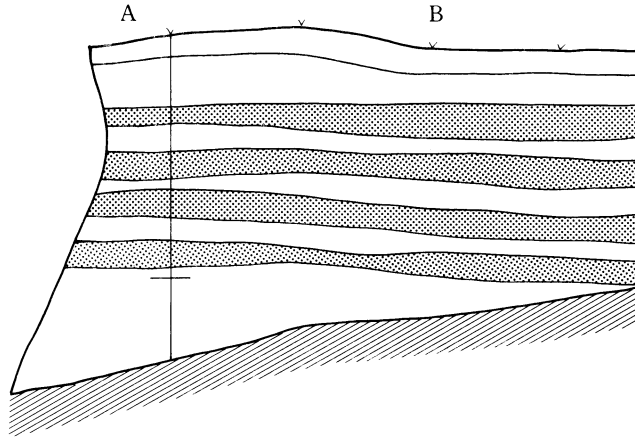
調査方法は、4m×4mの区画を基本とし、東西方向へA・B・C・・・、南北へ1・2・・・とし23区まで設定している。また、遺物のとりあげは、4m×4mの各グリッドをさらに1m四方に細分し16等分した。その結果、各小グリッドは、A-1区-1、B-18区-16として呼称している。また、個別に貴重品と思われるものについては、通し番号で記録を行ない、レベル測量を並行して取りあつかっている。

調査面積は、予想される遺跡面積の約50%に相当する1800㎡で、ほぼ全域にわたって貝殻を中心に、土器片・石器・魚骨・獣骨等が散布している。特に、A・B・C区は、ほぼ平坦面をなし、全面に自然遺物や人工遺物が所在する。D区から海岸線へかけては急傾斜地をなし、遺物の分布も部分的にみられる。傾斜面で認められる遺物の出土状況の特長は、中山清美の示した³貝だまり、³貝だめ、と同一と見ることができる。この傾斜面にみられる貝塚の部分的なまともりは、マガキガイ、イソハマグリ等を中心にした小型の種類が主で、斜面にへばりつく状態になっている。しかも、斜面の上位より一時に投棄され様相をよく残している。この破棄

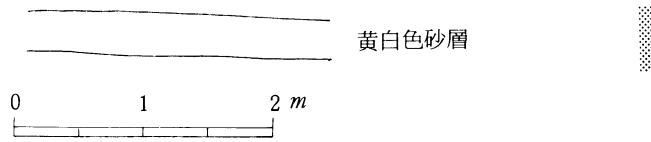
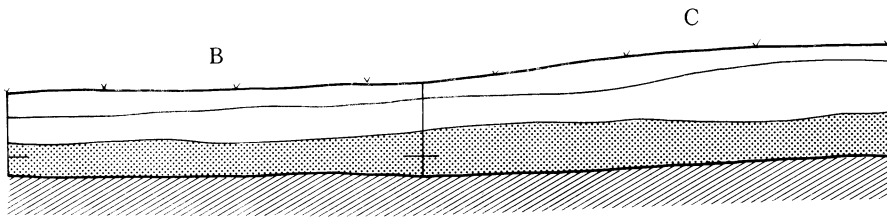


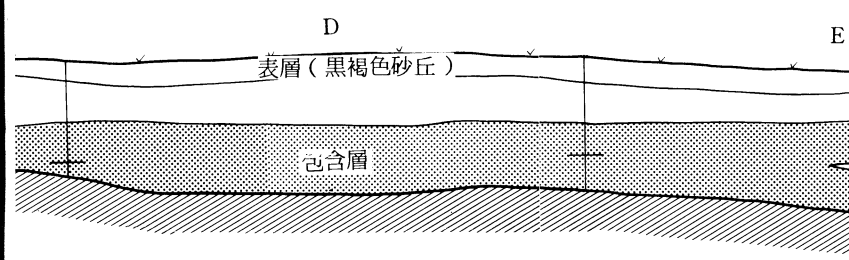
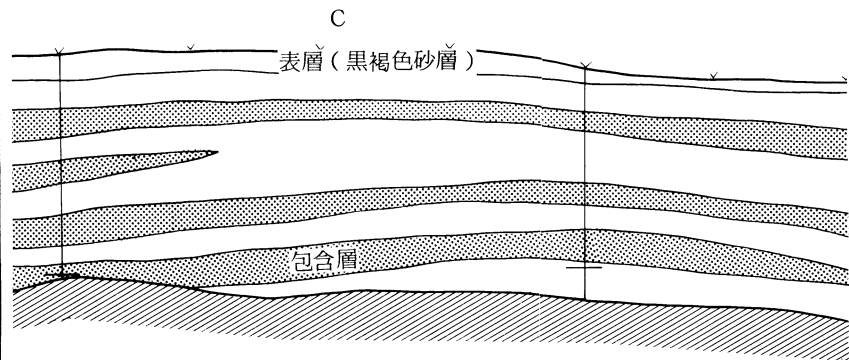
長浜金久遺跡の全景

8 列の土層



16 列の土層

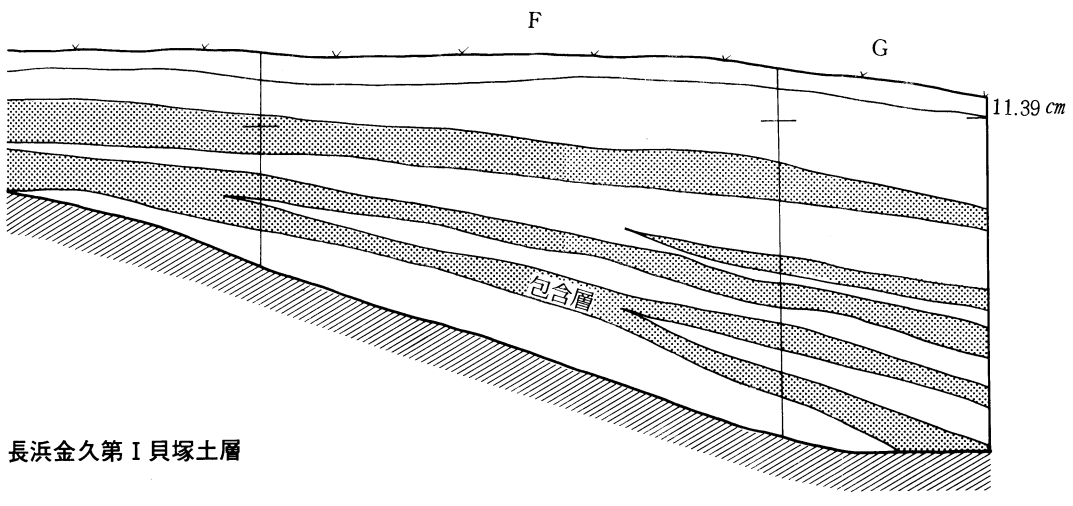
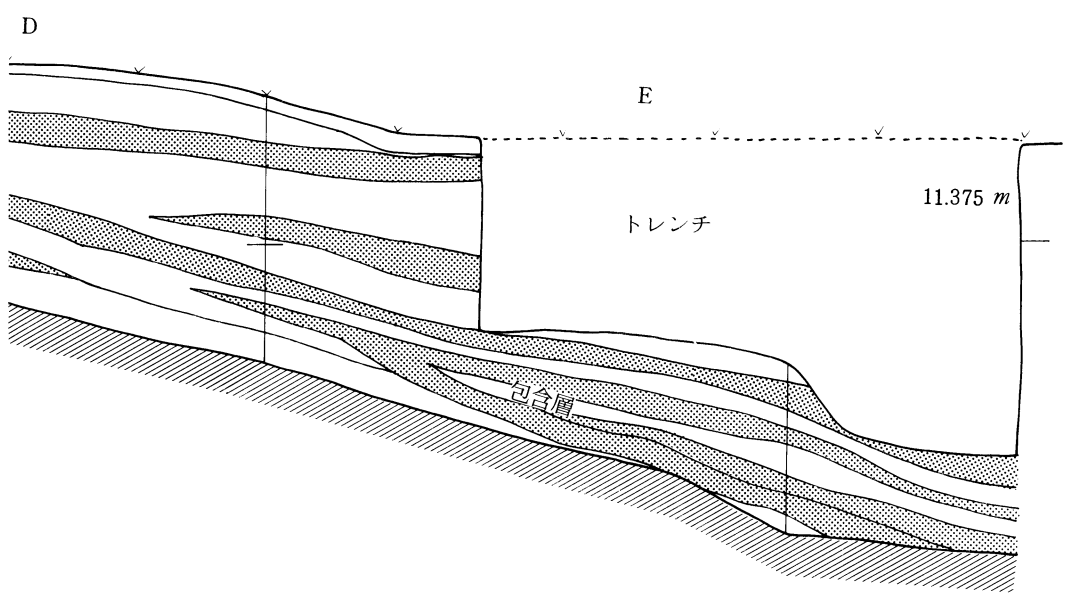




黒褐色砂層

A legend box containing a stippled pattern and the text '黒褐色砂層' (blackish-brown sand layer).

第3図



長浜金久第 I 貝塚土層

の仕方は、先ほど示した「貝だまり」と同一と見ることができ、具体的に投棄の実態をつかむことが可能である。即ち、一回分の投棄を「単位」として捉え、貝塚の生成をたどることができる。別図に示した遺物分布状況のD区以東（海岸方向への傾斜地）では、「まとまり」としての破棄の状況がよく示されている。次に、A～C区へかけての平面的分布状況を見ると、一見、不規則に投棄された状況を呈しているが基本的には傾斜地にみられる破棄のパターンに類似していると思われる。B・C-13・14・15区の密集地帯でも、それらをいくつかに分分することができ、複数の単位に分離することが可能である。したがって密集地帯は単位の集中した単位集団とみることができ、さらに、これらを総合してみると、傾斜地での基本的な破棄の方法はそれぞれ異なった場所への投棄の意図がうかがわれ、平坦地では意図された一定の場（エリア）へ繰り返し投棄したことがうかがえる。

次に、これまでの投棄とやや趣を異にしているのが、A-11・12区、B-11・12区・C-11・12区、D-11・12区に分布している一群である。この一帯は、本貝塚の他の地域とは異なり、これまでに示した単位として把握が困難な分布を示している。散布している貝殻も、これまでの主体を占めていたマガキガイと異なり、夜光貝、シャコ貝、大形のサラサバティ、クモ貝等の大型の貝が多くなり、



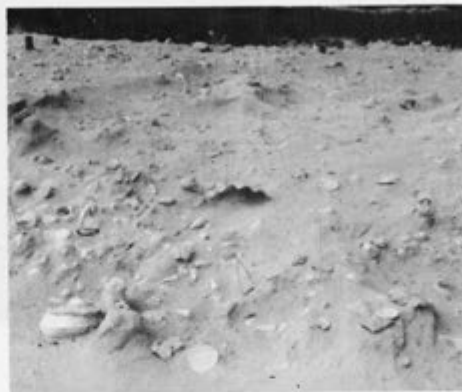
図版2 長浜金久第1貝塚の概要



図版3 長浜金久第1貝塚の概要



図版4 長浜金久第1貝塚



図版5 長浜金久第1貝塚

土器片も他の地域より多く集中している傾向がみられる。さらに注目すべきは、C-12区に位置している「アンビルストーン、(台石)で、繰り返し使用されたと思われ、表面には、使用痕が著しく残っている。また、このアンビルストーン周辺には多くの貝殻の破片が認められ、その総量は、土のう袋3袋分に達している、ちなみに、このような貝殻の破片(意図的に打撃を受けて小破片化したもの)の集中する例は、他のエリアでは認められない現象である。したがって、このアンビルストーンを用する一帯は、単なる投棄の場としてだけではなく、むしろ、ハンマーストーン・アンビルストーンを用いて、貝を割り、中身を取り出すための機能をもった作業場の様相が強く感じられる。

時間の制約の中での一部報告であり、掲載した図面も全体を示すに致っていない。今後、具体的に図化し、投棄のパターン等も示せるものと考えている。



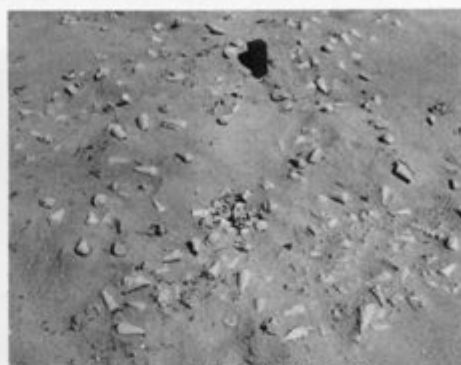
図版6 長浜金久第1貝塚



図版7 長浜金久第1貝塚



図版8 長浜金久第1貝塚



図版9 長浜金久第1貝塚

2. 出土遺物

1) 土器・石器 (第9図)

土器片や石器の出土の多くは、A～C区までの平坦面にみられ、さらに、分布する貝殻と共に発見されている。したがって、貝殻の分布と土器片・石器の分布は同一である。

出土している土器片は、兼久式土器の範疇に全て含まれるもので、形式的には、兼久式土器の単一遺跡と言える。完形品はなく、接合・複元作業を行なっても同様である。器種は、鉢形土器・甕形土器・壺形土器等がみられる。底部の形状は、壺形土器では丸底と思われ、鉢形・甕形土器では平底が一般的であるが、筒状の底部・張り出しをもつものがある。また、接地面には、木ノ葉の圧痕が一般的にスタンプされている。

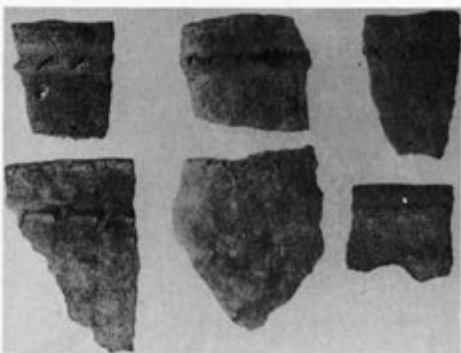
1は口径約20cmの鉢形土器で、煮沸具として使用したと思われる煮ごぼれやススの付着がみられる。器面調整は、ヘラナデによる仕上げがみられ、頸部には、ヘラナデによる粘土の溜りが紐状に残される。2は甕形土器で、内面には、製作時の粘土板の接着部がよく残されている。また、器面調整は繊維状のヘラナデで行なわれている。3は口径約7cmの甕形土器で、口縁部から頸部へかけて逆U字状に粘土紐が着けられている。

5は壺形土器と思われ、最大径が胴部最下位にあり、腰の安定した特異な形状を呈している。胴部上位、楕円形の孔が穿かれているが用途は不明である。胴部の最大径は約25.7cmと思われる。6の口径は23cmで、今回、採集した中で最も復元の進んだ土器である。文様は、半載竹管状の工具で、頸部を一巡する一条の状線文と、それに交差するコの字形の状線文で、浅い線文となっている。内、外面ともに、ヘラナデによる入念な整形が行われている。9は粘土紐が縦位に付され、10の鉢形土器では胴部上位に幅広で断面三角形の粘土紐が巡らされている。12・13は接地面に木ノ葉の圧痕が残されている。14・15は内面に布目圧痕文をもつ土器片で、他の兼久式土器を出土する遺跡でも数例が知られている。11は唯一の本土系土器で内外面ともに黒色に研磨されている。

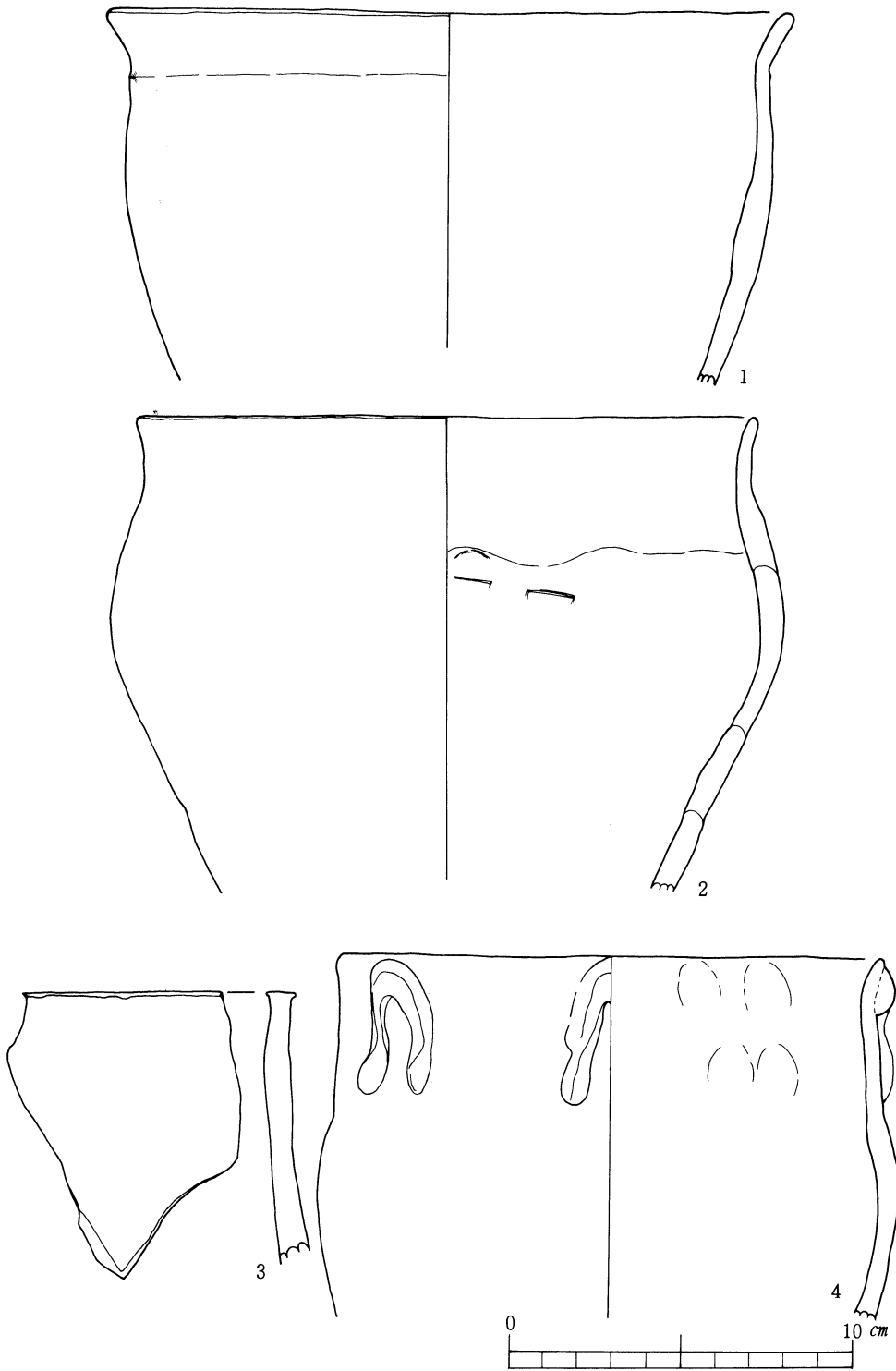
石器では、ハンマーストーンと台石となる凹石が主体で、量的にはハンマーストーンが圧倒的に優位である。



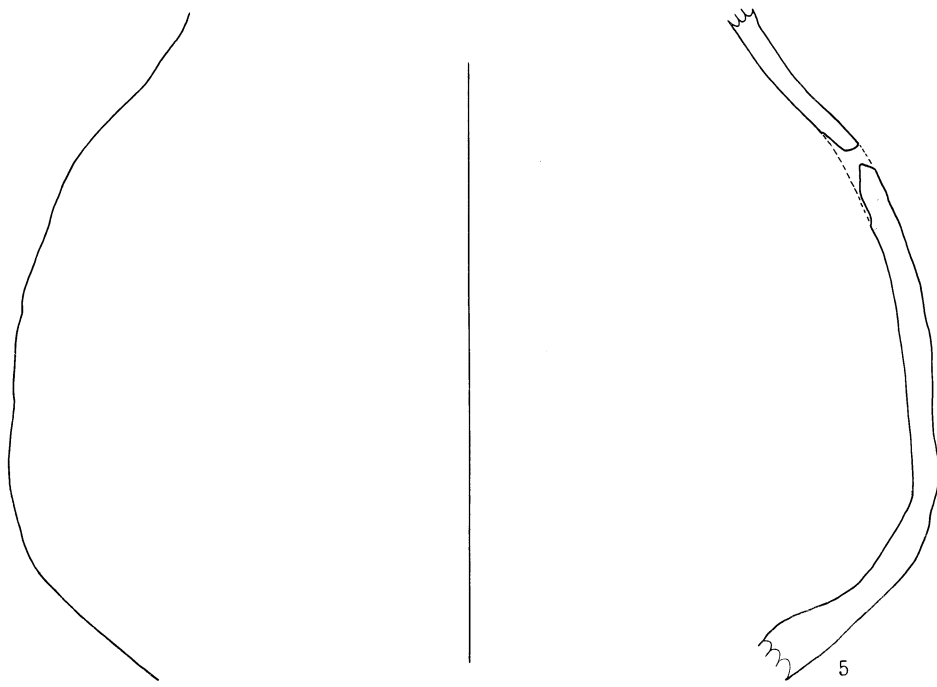
図版10 長浜金久第1貝塚の土器



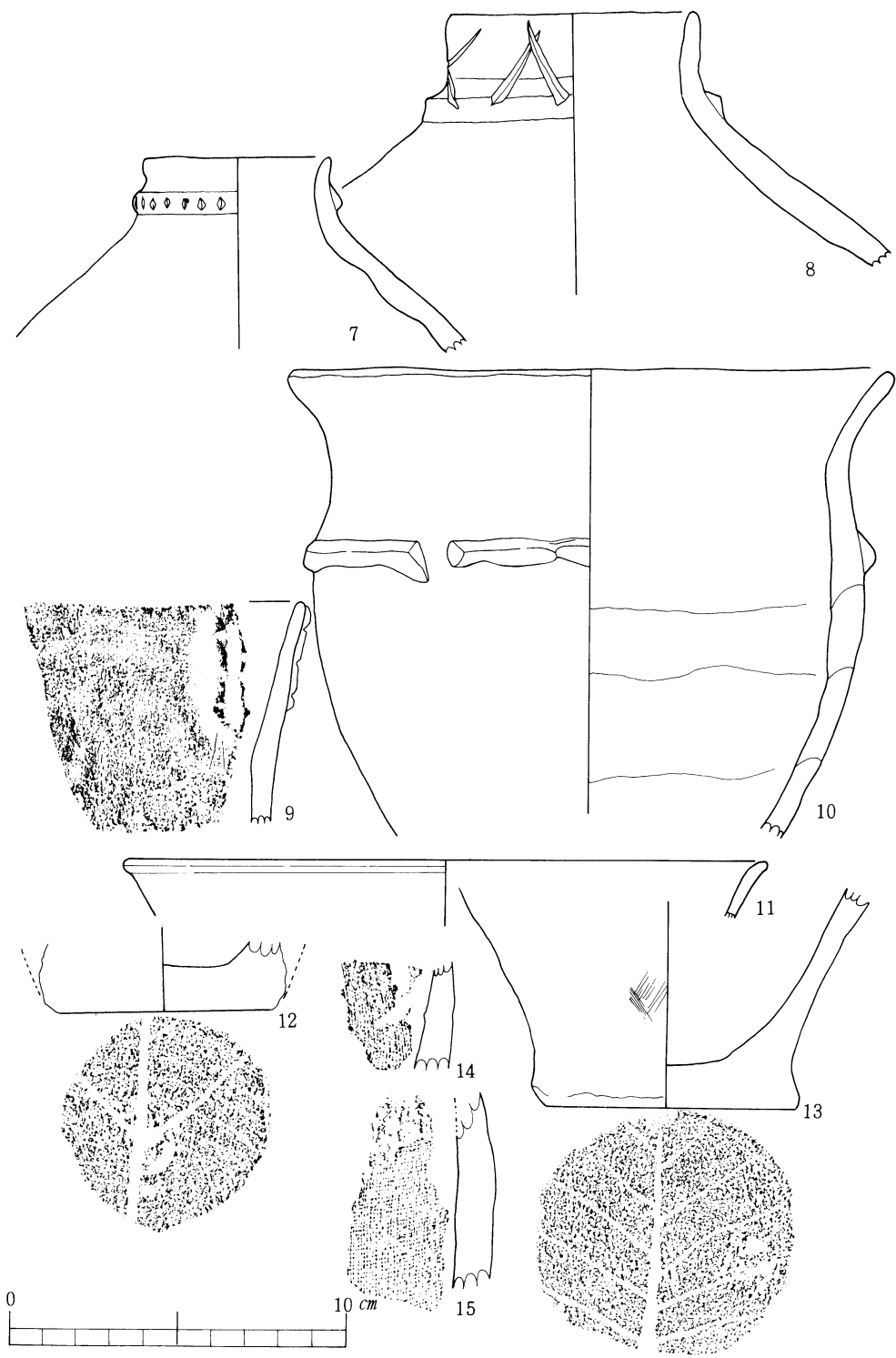
図版11 長浜金久第1貝塚の土器



第9図 長浜金久第1貝塚の土器1



第10図 長浜金久第1貝塚の土器2



第11図 長浜金久第1貝塚の土器3

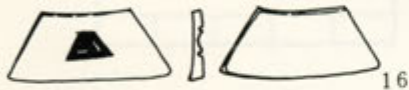
2) 貝加工品

ヤコウガイの蓋を利用した「螺蓋製貝斧」・貝匙・メンガイやウミギクガイ等を利用し一ヶ所に穿孔した貝錘・イモガイ類の螺塔先端部を研磨し穿孔した貝垂飾品や貝玉、さらに、特殊なものとしてボラガイの殻口内唇部にそって円孔を穿った「ホラガイ容器」、イモガイを用い、台形状に製形した、「貝札」が今回の調査で発見されている。

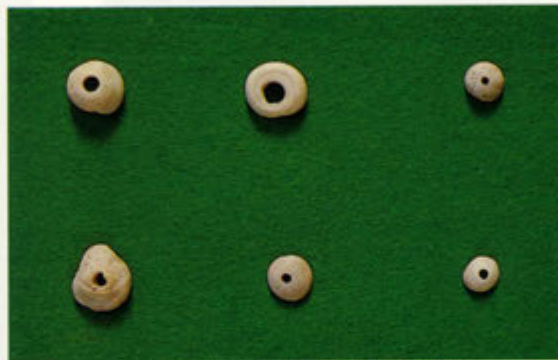
以上の貝加工品の中で、最も大量に出土しているのがヤコウガイ製の貝匙であり、総数で 100点を越すものと見られる。次が、螺蓋製貝斧で 100点近くが発見されている。貝匙の中で、最も多い形状のものは、これまでの研究では結節をそのまま残した「未製品」と呼ばれているものである。

なお、結節・螺肋等を完全に取り去り、研磨等の調製加工を行なっているのは10点にも満たない。このことは、単に未製品としてだけでは説明し得ない要素が含まれている可能性もあり次の報告の際に細かく検討したい。

螺蓋製貝斧は数種に分類することができる。1は刃部を蓋の縁のほぼ半周ほどを内側に向かって打ち欠いたもの。2は縁の一ヶ所を打ち欠いたもの。3は両端の二ヶ所を同様に打ち欠いたもの。4は縁の三ヶ所を打ち欠いたもの等、変化にとんでおり安定した内容を示していない。このことも今後、



第12図



図版12 長浜金久第1貝塚の貝玉



図版13 長浜金久第1貝塚の貝札



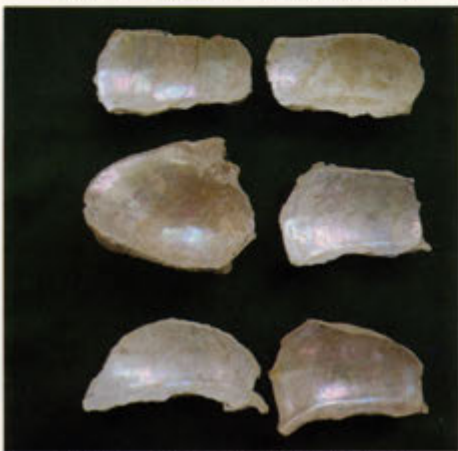
図版14 長浜金久第1貝塚のボラ貝容器



図版15 長浜金久第1貝塚の貝匙



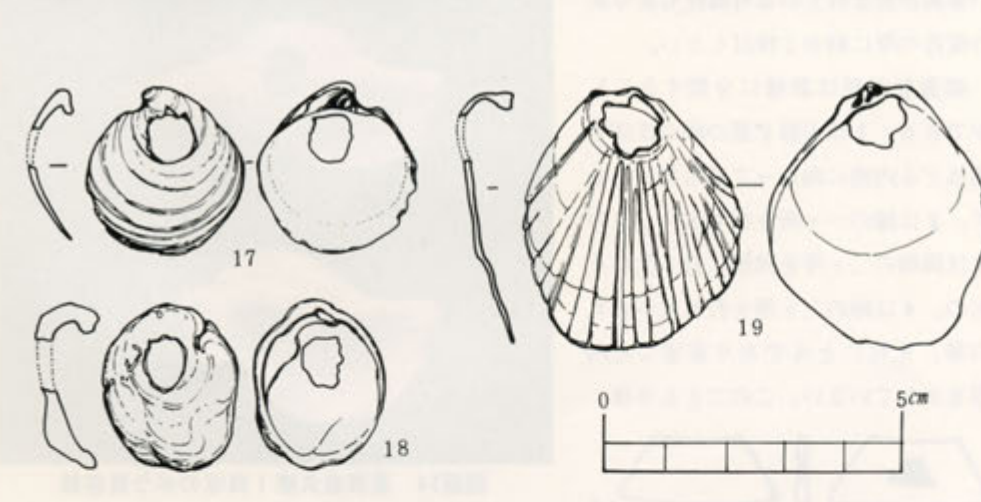
図版16 長浜金久第1貝塚の貝斧



図版17 長浜金久第1貝塚の貝匙



図版18 長浜金久第1貝塚の有孔貝



第13図

検討すべきことと思われる。

貝玉は、イモガイ類を利用したもので6点確認している。しかし、6点の中で確実に人工品と判断できるのは、研磨痕の観察できる1点だけあり、他の5点については人工的な研磨等の痕跡は明確でないが、形状的にはこれまで貝玉として知られているものと同一である。

ホラガイ製の容器は殻口内唇部にそって円孔を穿ったもので2点出土している。この容器と同種のもは、サウチ遺跡でも1点が認められるようである。

貝札(第12図)は、1点だけの出土で、上辺1.30cm、底辺2.30cm、高さ1.00cmの台形に近い形状を呈している。文様は中心部に三角文を彫り込み、さらにその外側に台形状に線刻している。

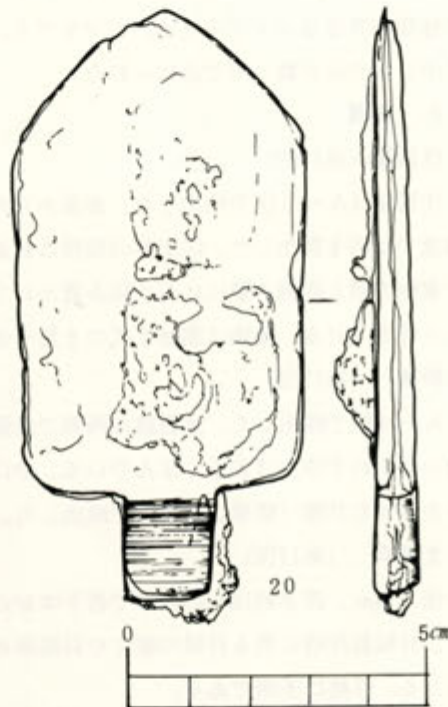
貝鍾はB-9区-13で一捨して出土したのをはじめ、全域からまんべんなく出土している。一括出土は48点で検出された状況はあたかも紐で繋いだ様であった。

3) 鉄製品

57年度の第1次調査の際に3点の鉄製品が出土しており、器種不明のまま今回の調査に至った。今回の発見例は5点でそのうち器種の明らかなものは、釣針1点と第14図に示したものの2点である。兼久式土器に鉄製品の伴うことは、今回の調査で明らかになったと考えられる。なお今後は、類例の検討が必要になろう。



図版19 長浜金久第1貝塚の鉄製品



第14図 鉄製品

〈参考文献〉

中山清美 「奄美大島の先史時代」『南島史学』 No.17・18 1981

中山清美 「付説 砂丘性小遺跡について」『ロケジ遺跡』笠利町教育委員会 1983・3

河口貞徳・出口浩・本田道輝 「サウチ遺跡」笠利町教育委員会 1978

第2節 長浜金久第Ⅱ貝塚の概要

1. 貝塚の概要

長浜金久第Ⅱ貝塚は第Ⅰ貝塚の海岸側に対して山手側の貝塚である。第Ⅱ貝塚は第1次調査で発見された第Ⅱ地点の遺跡である。(第2図参照)

第1次調査では8ヶ所のトレンチを入れ、集石遺構と人骨及び包含層を確認した。第2次調査では第Ⅱ地点が貝塚遺跡であることが判明し、また、人骨は砂丘形成の状況から、本貝塚とは異なる時期のものと判断した。(人骨は新砂丘内に検出)

第2次調査の調査面積は約160㎡で遺跡を約4m幅で東西に縦断する形になった。西側は山手で住居跡、炉跡、土壇が検出され、東側の海岸側に貝塚が形成されている。この遺跡は旧砂丘上にできたと考えられ遺跡の生活面が海岸側では2～3m急傾斜し、旧海岸線と思われるところは書面が摩耗した貝殻やサンゴが多く出土した。この旧砂丘は幅が約30mで山手に向かって薄くなっている。また住居跡や土壇のあるところは若干凹地になっている。(第15図参照)

貝塚の包含層は標高は約8.8mあり、厚さは約30～20cm、奥行は約8m位で、部分的には貝の種類が異なるがマガキガイ、アマオブネ、スイジガイ、クモガイ等がみられた。また、貝塚の中に炭や灰が数ヶ所で認められた。

2. 遺構

住居跡 (第17図)

住居跡はA—5区で検出した。表面からの深さは約1.5mで、旧砂丘を掘り込んであり、本調査では約露出した。住居跡の規模は長さ2.3mの角丸方形で深さ約20～30cmの竪穴住居跡で東側の壁と西側の壁には石が組み置かれている。この石は砂丘であるため壁の崩壊を防ぐためと考えられる。遺物は嘉徳Ⅰ式の土器や骨角器が出土している。

炉跡 (第17図)

A—4区で検出した。住居跡の西側で表面から深さ約1.5m下で発見した。20～30cmの石を敷いたもので中央は若干くぼんでいる。中には灰・炭が多くみられその上に40cm位の平たい石をかぶせた状態(破棄した石)で検出した。規模は直径80cmの円形状である。

土壇A (第17図)

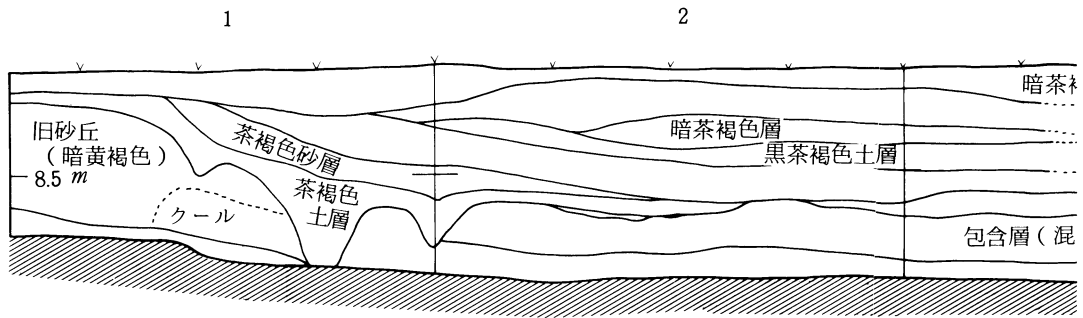
径1.4m、深さ約18cmの円形で若干ゆがんだ形をしている。中には石や貝製品の壊れたもの、貝輪製作時に出る貝殻の破片や貝殻等が出土した。検出位置はB—5区で住居跡の南側にあたる。性格は不明である。

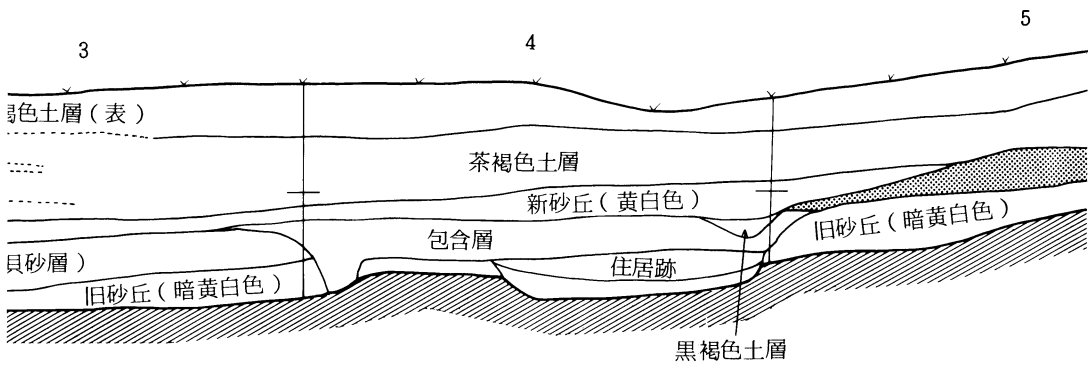
土壇B (第16図)

A—8区に検出したもので縦約2.1m、横約0.6m、深さ約30cmで長方形をした土壇である。表面からの深さは約1m位で新砂丘内に検出した。土壇の中央は黒褐色を呈する。土壇内に遺物はなく、土壇上面に石が検出した。性格は不明である。

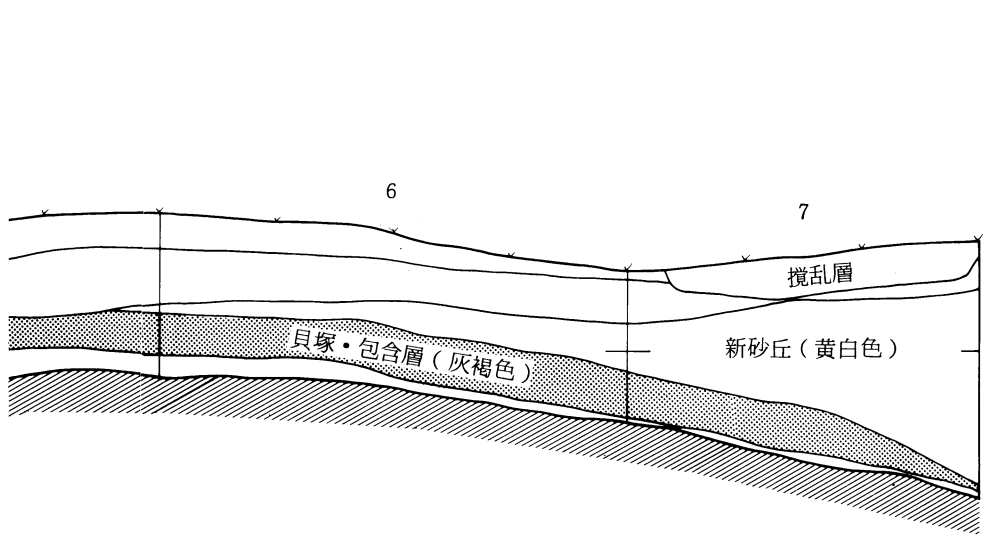


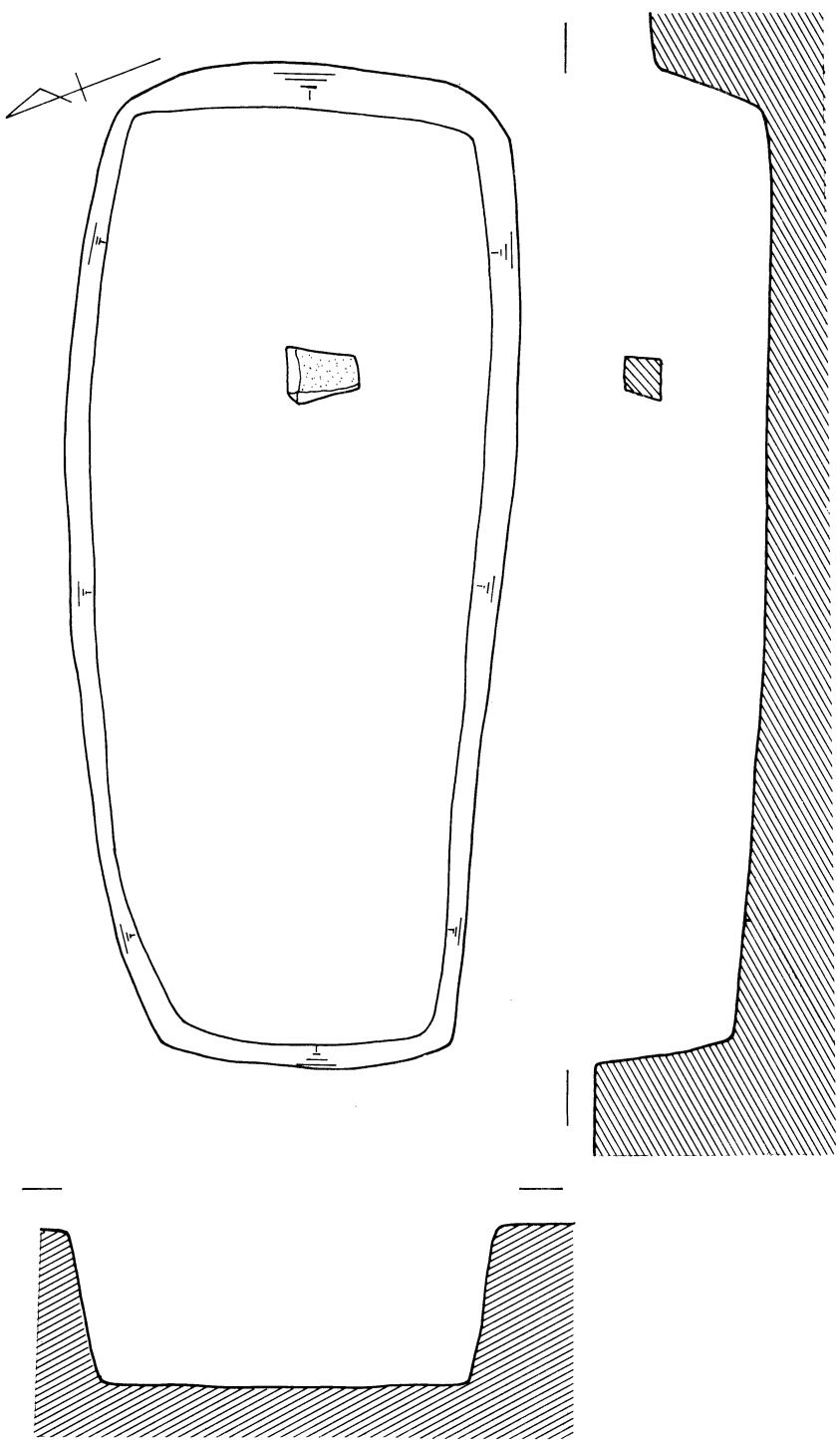
第15図 長浜金久第Ⅱ貝塚の遺構と砂丘形式



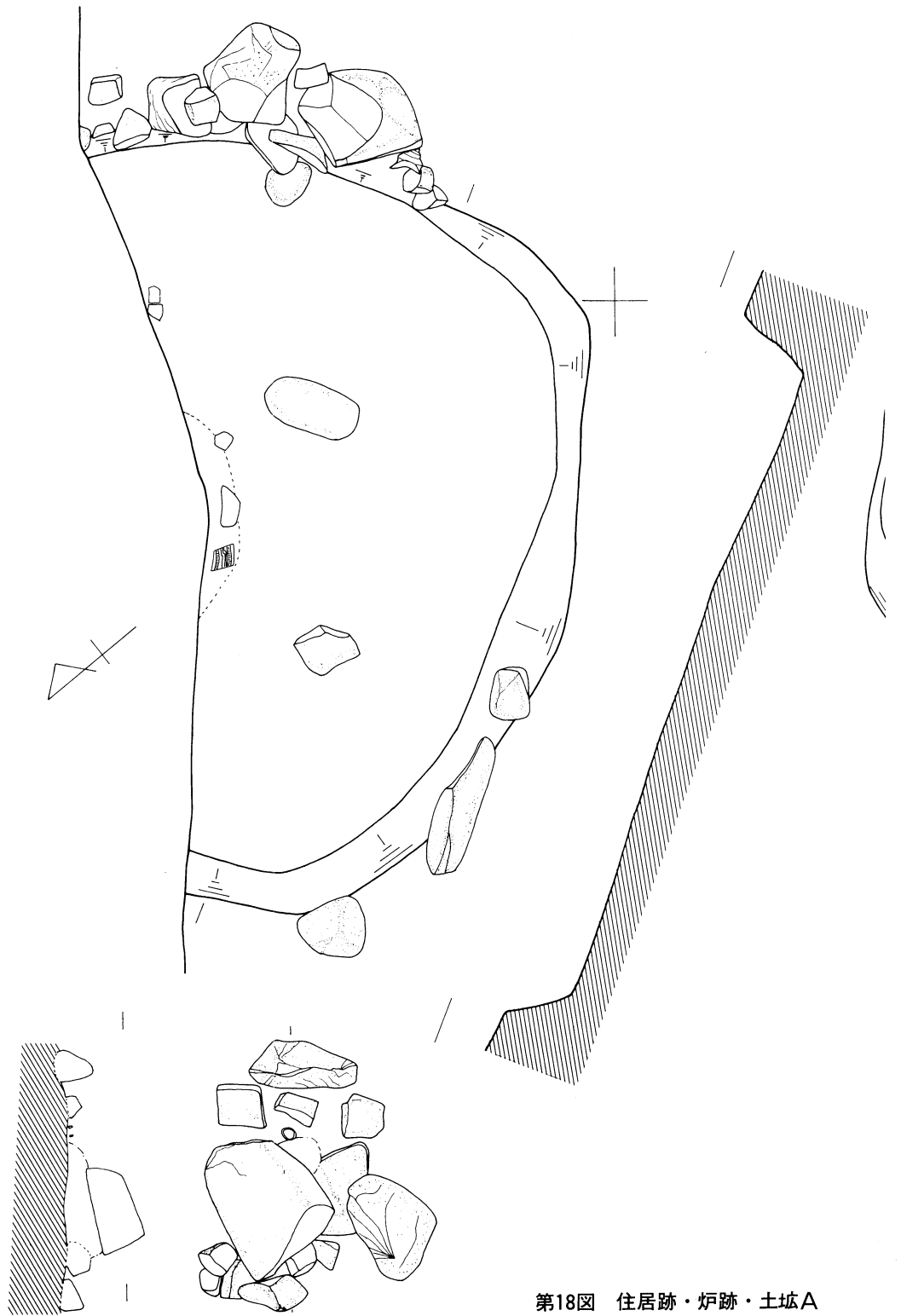


第16図 長浜金久第Ⅱ貝塚土層

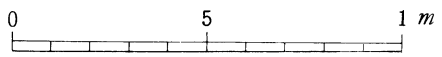
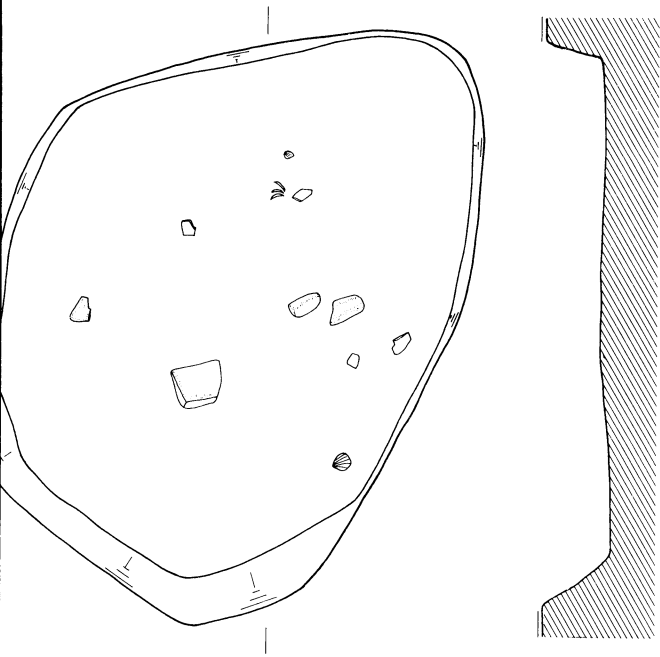




第17图 土塚B (新砂丘)



第18図 住居跡・炉跡・土壇A



3. 出土遺物

1) 土器

土器は6つの類に分けられる、21～29で口縁部が肥厚し、その部分に文様を施こし稜杉状の施文をもつものと、押し引き文をもつものである。器形は深鉢で山形口縁もみられる。これらは嘉徳ⅠA式に比定できる。

Ⅱ類は本貝塚の主体をなすもので、器形は深鉢で山形口縁が多い。25～53で文様構成は口縁部と胴部に施文し、口縁部の文様は沈線と篋先施文具による刺突の連続文で胴部の文様は数条の沈線で鋸歯状に施文する。なおⅡ類は文様のバリエーションとしてa～eがみられた。aは平行沈線文と区画文内のすべてに爪形状の連続文を施こし、bは区画文内に刺突連続文を施こさない、cは区画文がない、dは区画文ではなく、三本の沈線を施こす。eは下部に変形の沈線を施こす。bは下部に数条の沈線を施こすものがみられる。

Ⅲ類は深鉢形で口縁部に沈線の文様を施こすもので嘉徳Ⅱに比定できる(54～55)

Ⅳ類は深鉢形で口縁部に条痕状の沈線で文様を施こすもので(56～58)この類は面縄第Ⅱ貝塚上層に類似形態がみられる。

Ⅴ類は深鉢形で口唇部に突帯をつけ、荒い沈線を雑に施すもので(59～61)この類は面縄西洞式に近いものと思われる。

Ⅵ類は深鉢形で細い沈線で丁寧な文様がみられ、胴部に刻目突帯がみられる類で(62)の類は犬田布貝塚に類似形態がみられる。

底部は64～71である。平底が主で64や70のように若干上げ底状のものもある。また64は5ヶ所にイボ状の突起をつけている。

2) 貝加工品・骨角器

72・73は貝輪である。貝輪は74本出土し、3組が接合できた。その中の2本が完形になった。貝の種類はオオツタノハですべて破損しているので製作途中で捨てた可能性が強い。また研磨度もまちまちである。

74はスিজガイの貝製品である。スিজガイの胴部をつぶしている。性格は不明、

75は土塚Aより出土したもので破損している。貝の種類はゴホウラの可能性が強いが明確な種類の名は不明である。この貝製品は貝符に近い形をし、他に1点土塚Aより出土した。

76は骨製品である。住居跡内より出土した。両端が尖り用途としては釣針の類と考えられる。他に1点出土している。(これは国分直一氏の教示による)

3) 石器

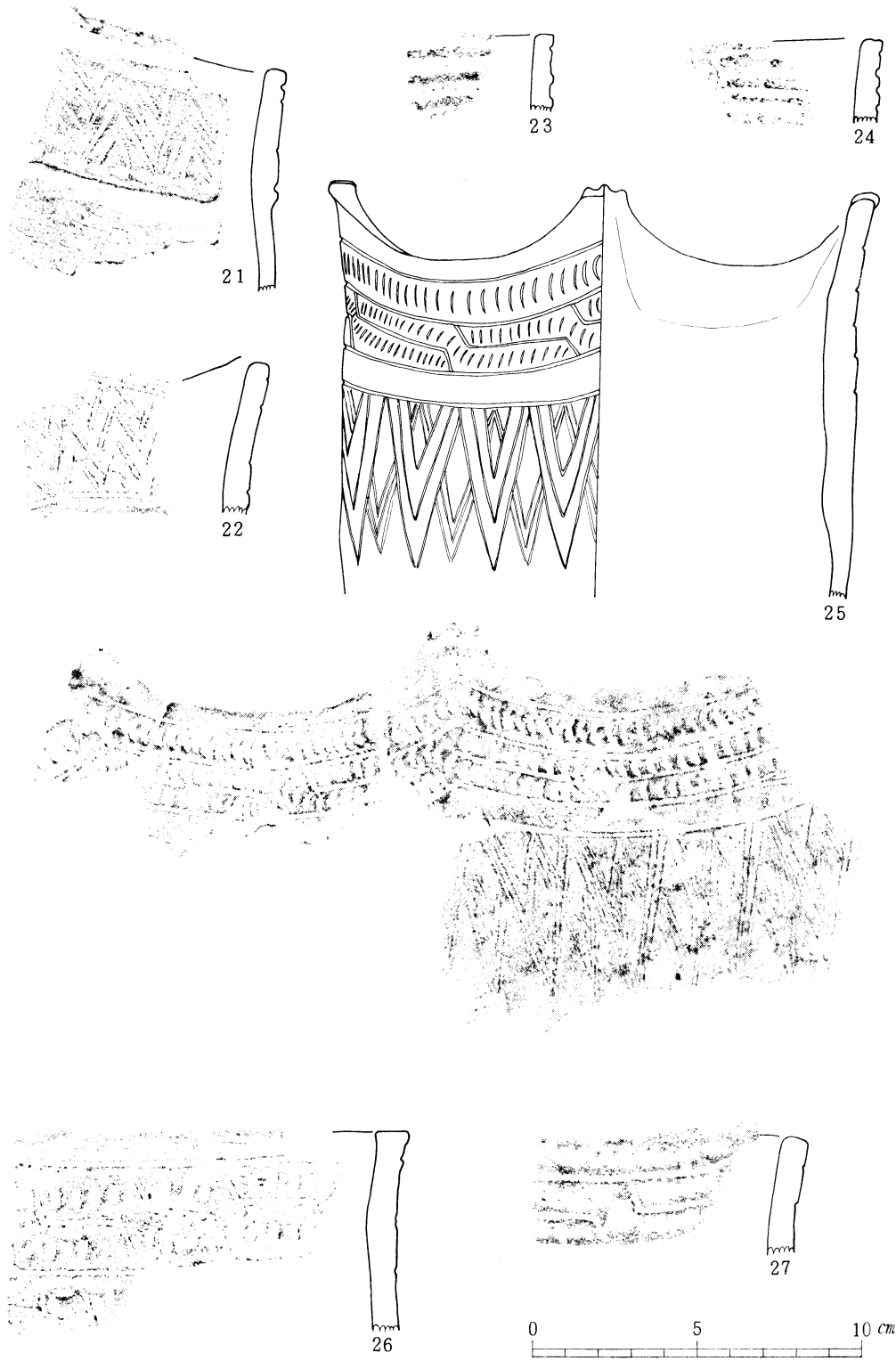
77は扁平な石版に数本の溝がみられる。直線で断面が半円状をなすもので、石版の片面に1本から数本あり、両面にわたるのが多い。この石版の溝は深さもまちまちで1本ずつ通した状態である。用途は今のところ不明である。ただし宇宿貝塚では研磨器としている。

以上が出土遺物の大まかなものである。

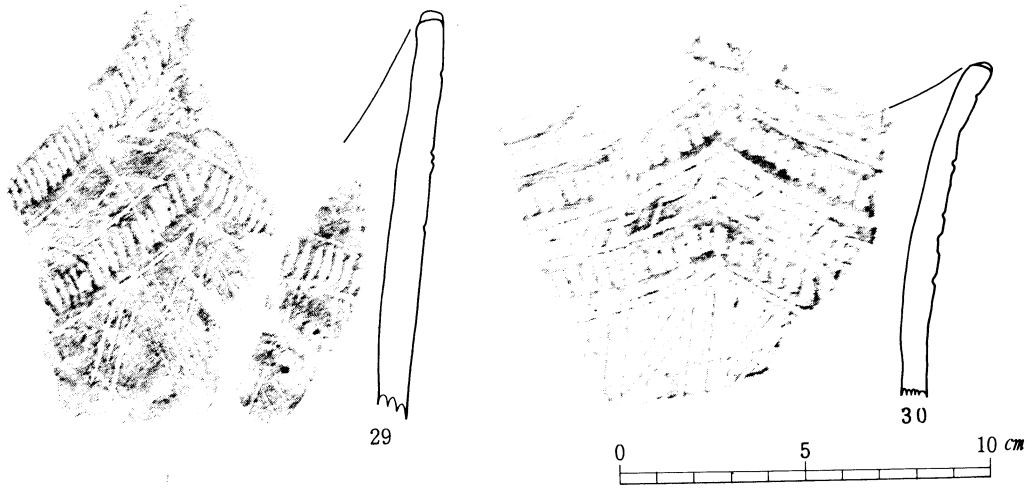
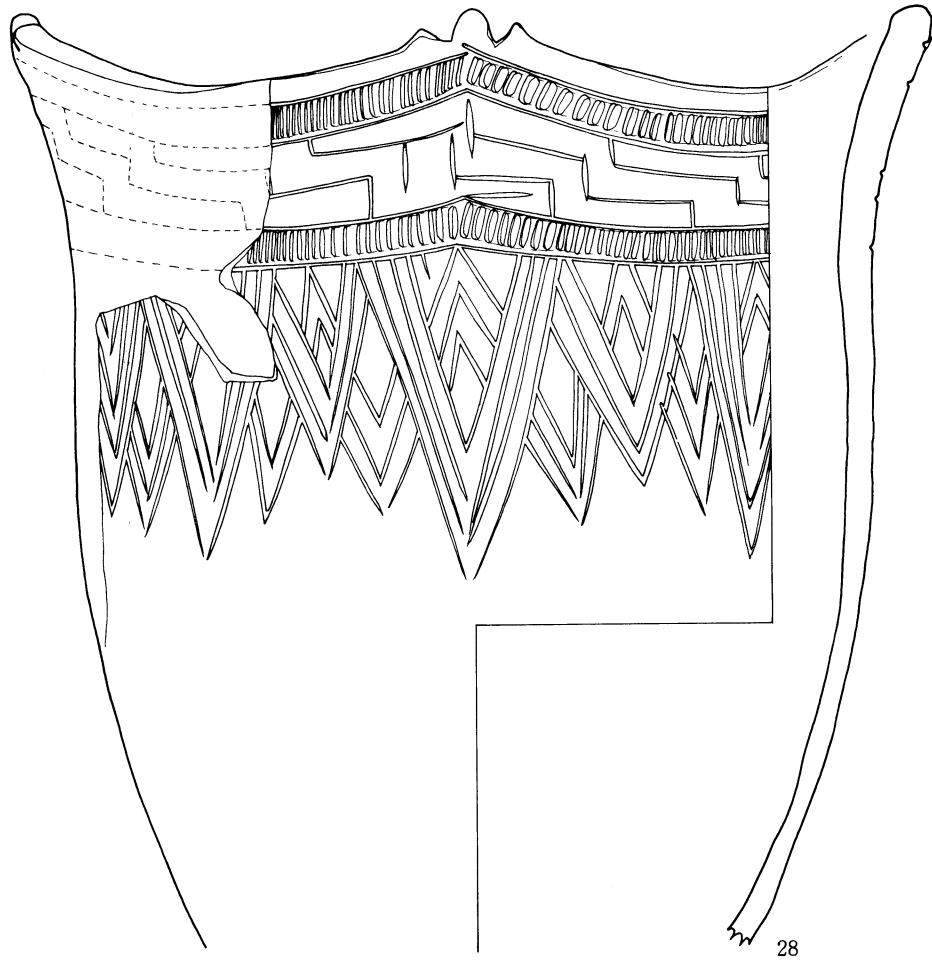
なお遺物の詳細と貝類の分類は本報告で行ないたい。

第1表 遺物の分類表

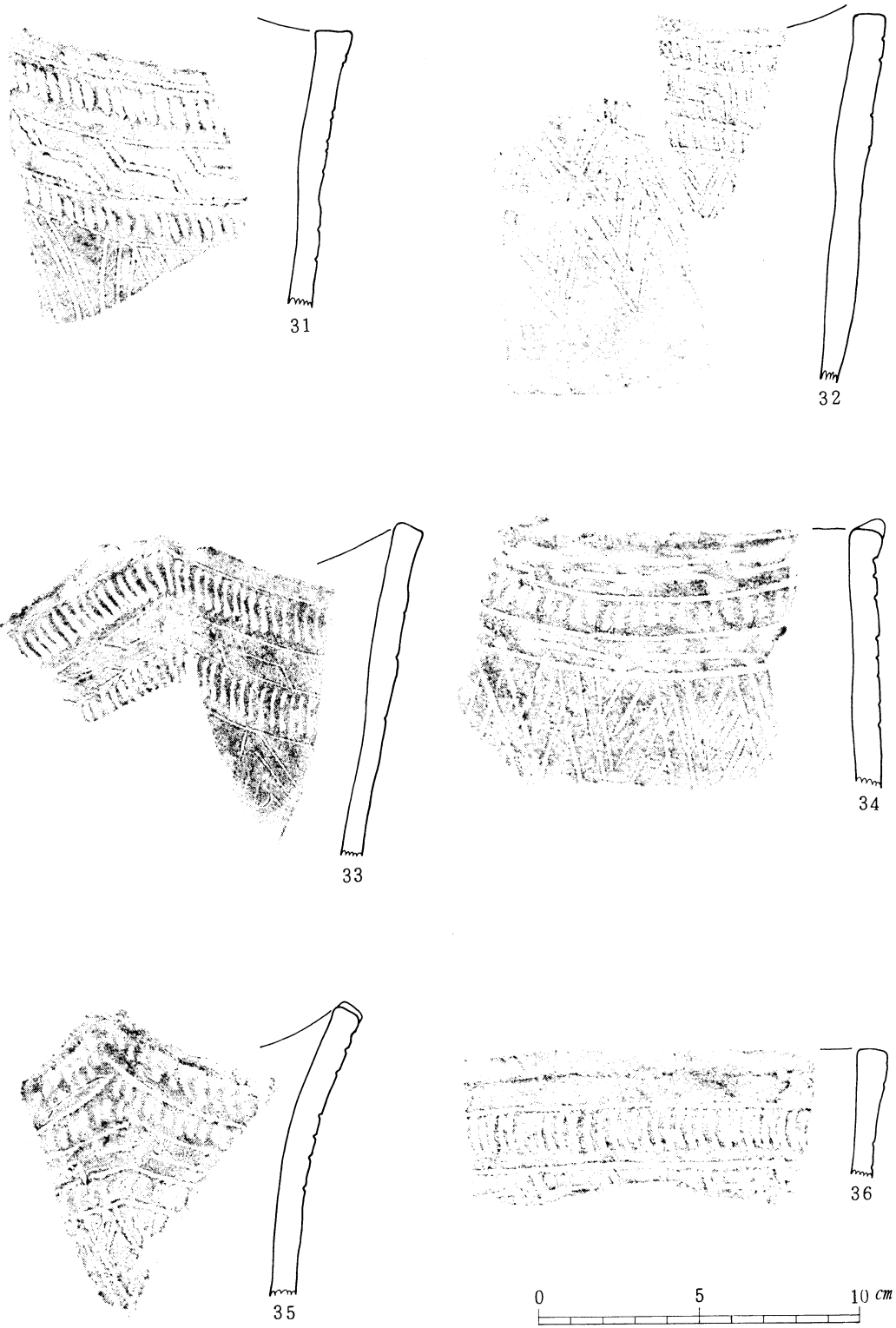
番号	出土区	類	バリエーション	挿図番号	図版番号		出土区	類	バリエーション	挿図番号	図版番号
21	7トレンチ	I類		第19図		54	A-6	III類		第26図	24
22	A-4	I類		〃		55	A-2	III類		〃	
23	A-6	I類		〃		56	B-4	IV類		〃	24
24	A-6	I類		〃		57	7トレンチ	IV類		〃	24
25	A-7	II類	a	〃	22	58	B-6	V類		〃	
26	A ⁶ _{A-7}	II類	a	〃	22	59	A-8	V類		〃	24
27	B-6	II類	a	〃		60	7トレンチ	V類		〃	
28	7トレンチ	II類	b	第20図		61	7トレンチ	V類		〃	
29	A ⁷ _{A-6}	II類	b	〃	22	62	B-6	VI類		〃	24
30	B-7	II類	b	〃	22	63	A-8	底部		〃	24
31	B-7	II類	b	第21図	22	64	B-7	〃		第27図	24
32	B-7	II類	b	〃	22	65	A-6	〃		〃	
33	B-6	II類	b	〃	22	66	A-6	〃		〃	
34	A-6	II類	b	〃	22	67	B-6	〃		〃	
35	一般	II類	b	〃	22	68	A-6	〃		〃	
36	B-7	II類	b	〃	23	69	A ²⁻⁹ _{A-4}	〃		〃	
37	A ⁶ _{B-7}	II類	c	第22図	23	70	A-5	〃		〃	
38	A ⁶ _{A-7}	II類	c	第22図	23	71	B-7	〃		〃	
39	B-7	II類	c	〃	23						
40	B-7	II類	c	〃	23						
41	7トレンチ	II類	c	〃							
42	A ⁶ _{B-6}	II類	c	〃	23	番号	出土区	材料	挿図番号	図版番号	
43	A ⁶ _{A-7} B-7	II類	c	第24図	23	72	B-7	貝	第28図	25	オオツタノハ
44	B-6	II類	d	第25図		73	B-7	貝	〃	〃	〃
45	B-7	II類	d	〃		74	A-5	貝	〃	26	スイジガイ
46	A-7	II類	d	〃		75	土 塚	貝	〃	〃	ゴホウラ
47	A-5	II類	e	〃	24	76	住居跡	骨	〃	27	
48	B-6	II類	e	〃	24	77	B-6	石	〃	〃	
49	A-6	II類	e	〃							
50		II類	e	〃							
51	B-6	II類	e	〃							
52	A-4	II類	f	〃	24						
53	A-4	II類	f	〃							



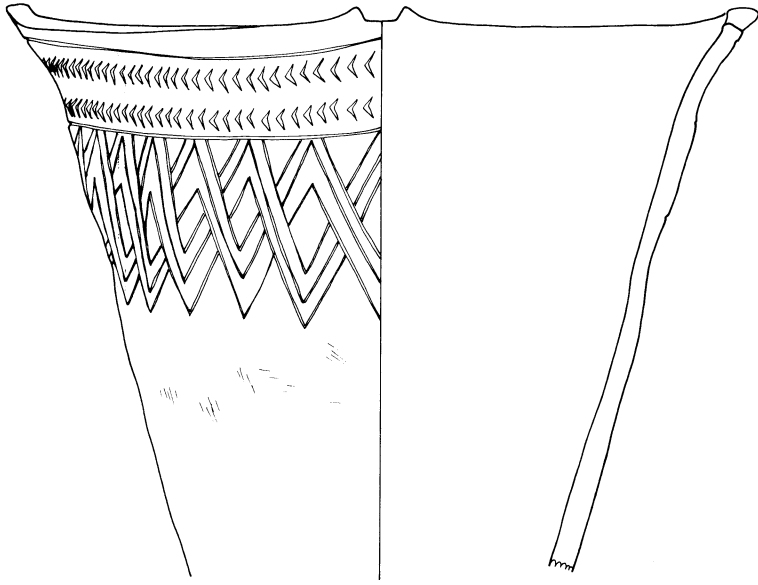
第19図 長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅰ類・Ⅱ類 (a)



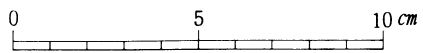
第20図 長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類 (b)



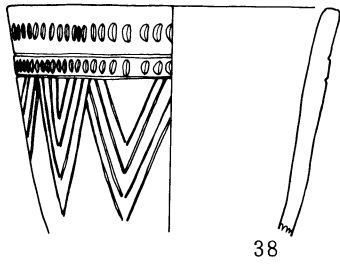
第21図 長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅱ類 (b)



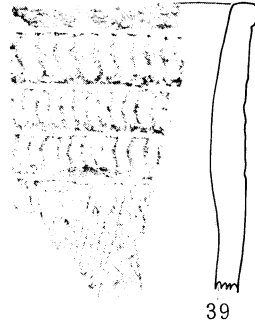
37



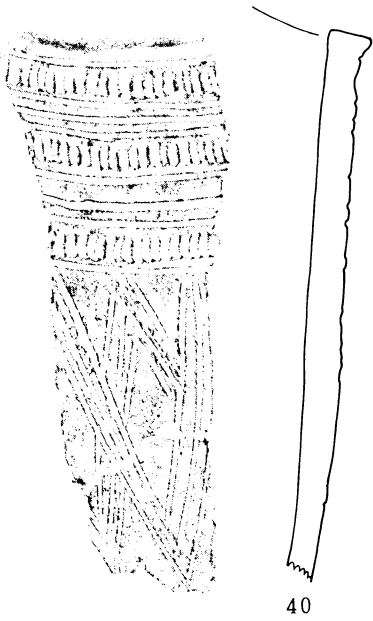
第22図 長浜金久第Ⅱ貝塚・Ⅱ類(c)



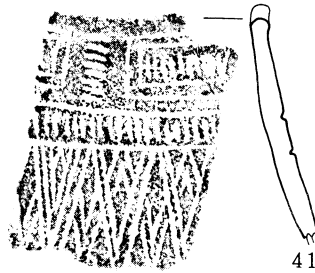
38



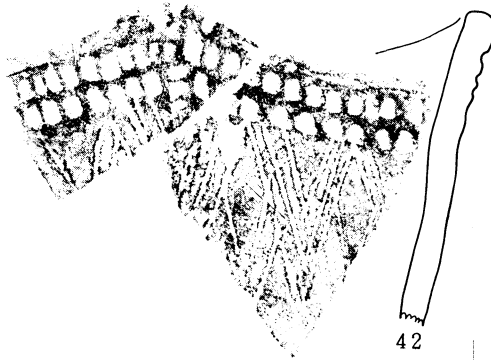
39



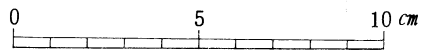
40



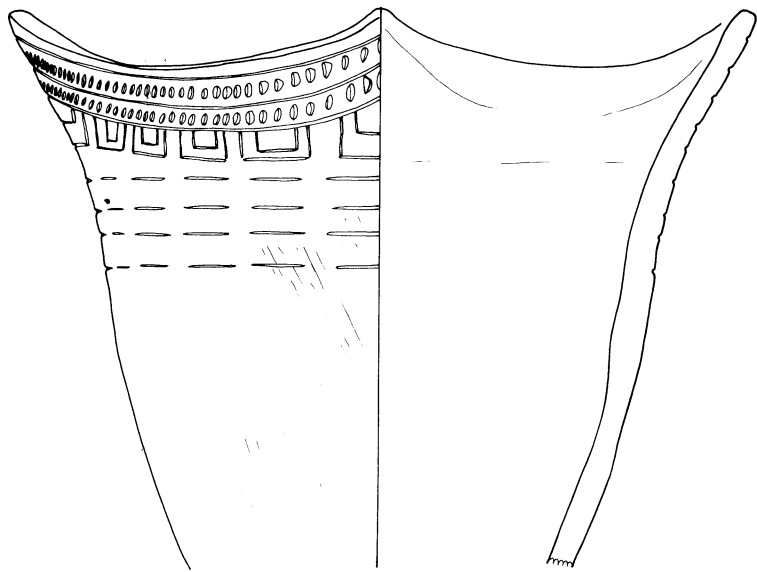
41



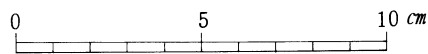
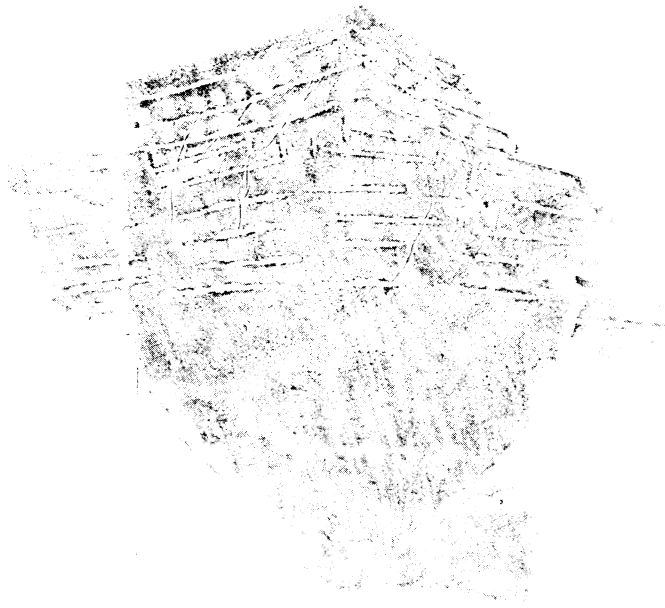
42



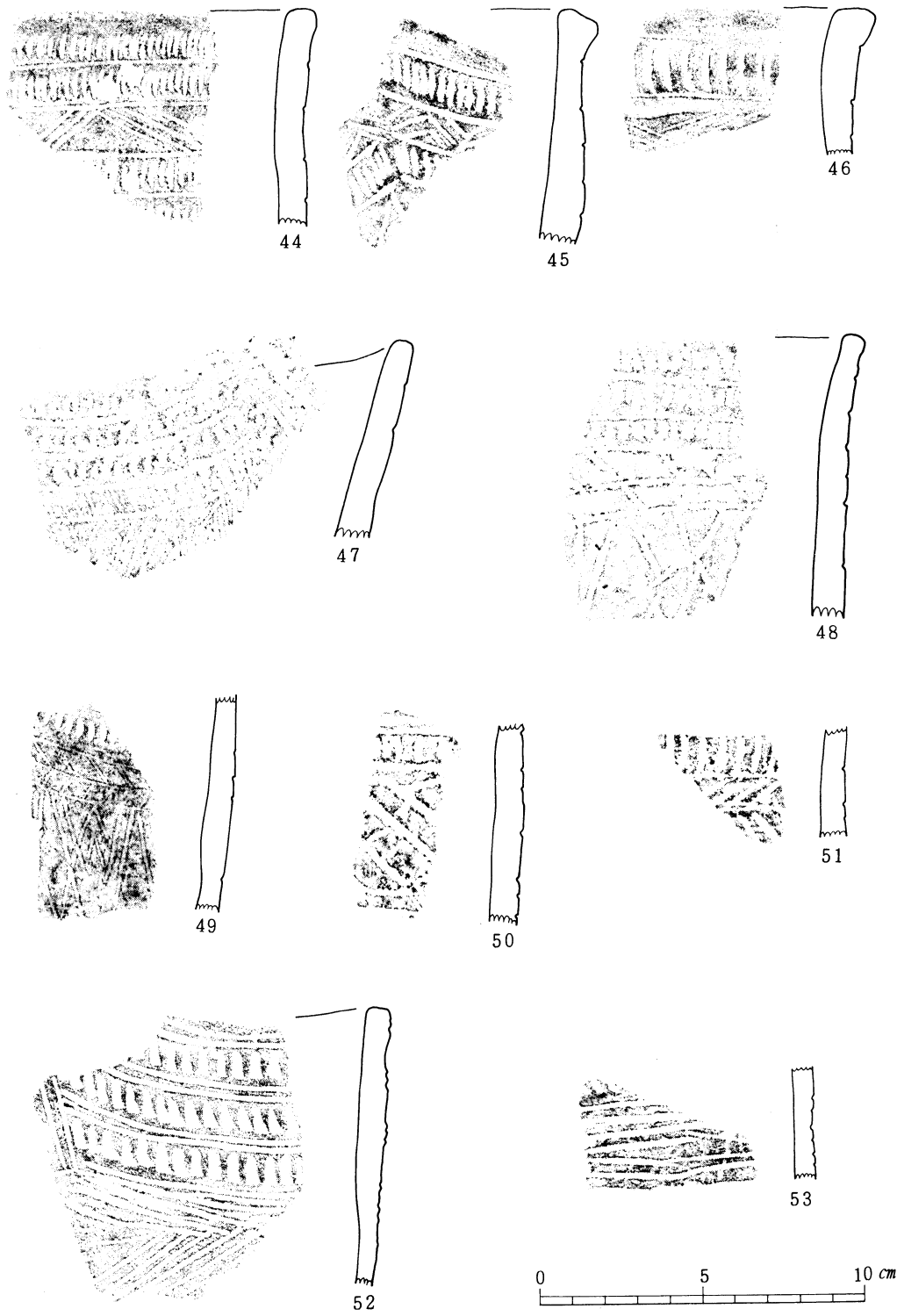
第23図 長浜金久第Ⅱ貝塚・Ⅱ類(c)



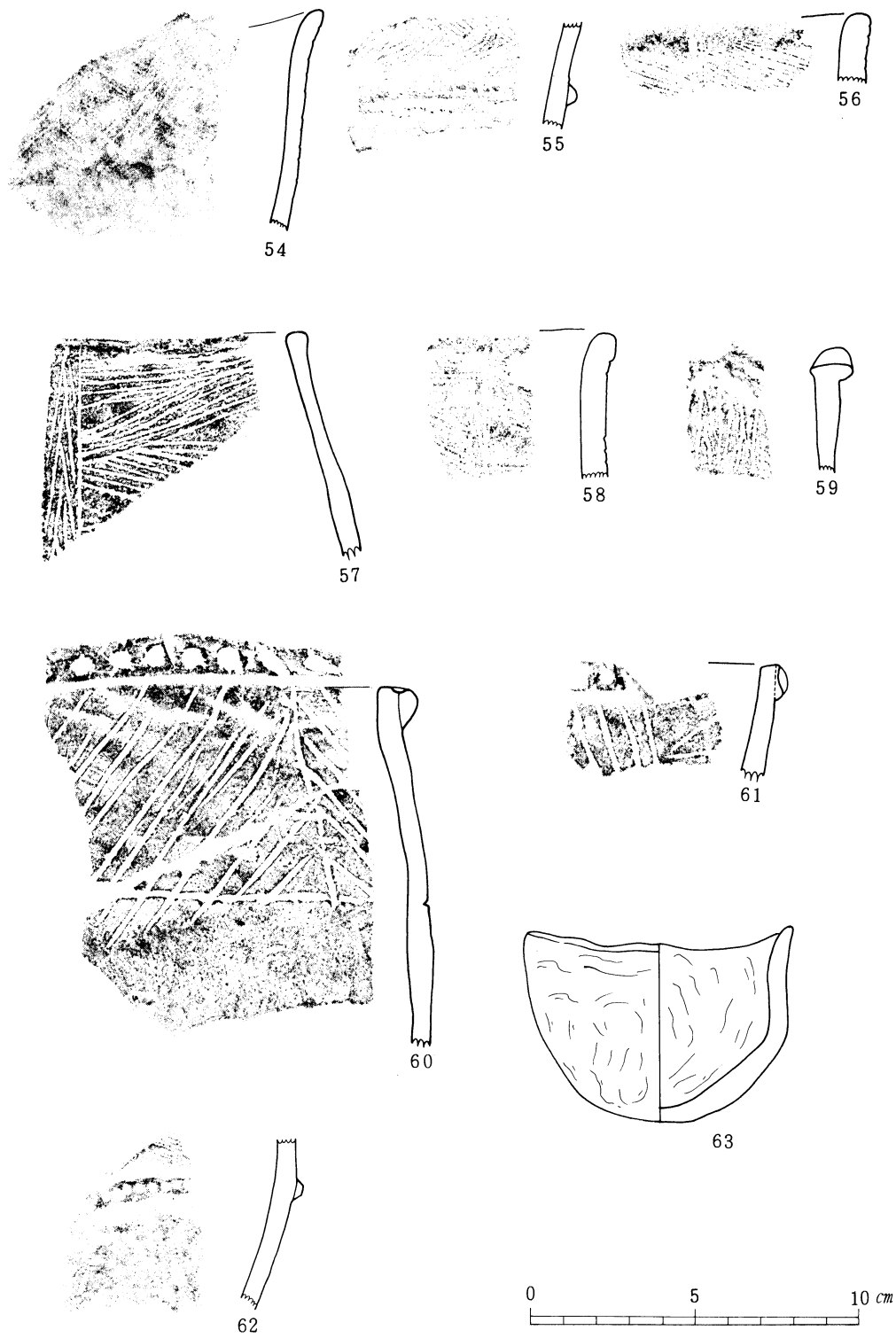
43



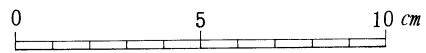
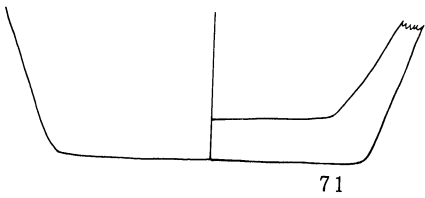
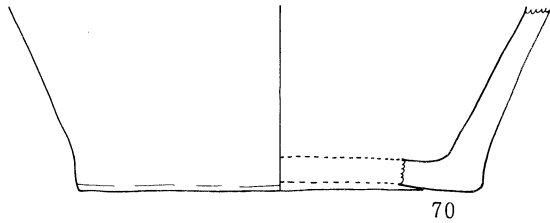
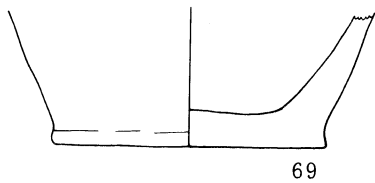
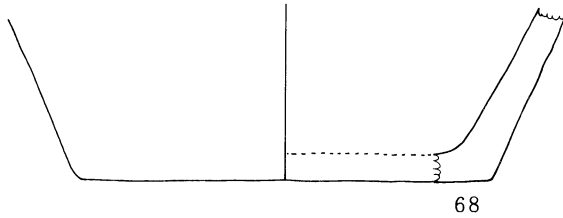
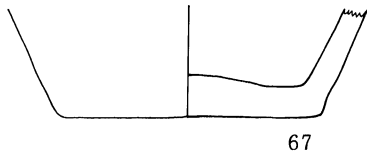
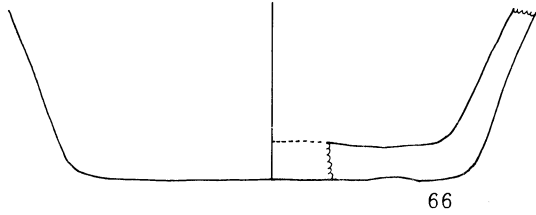
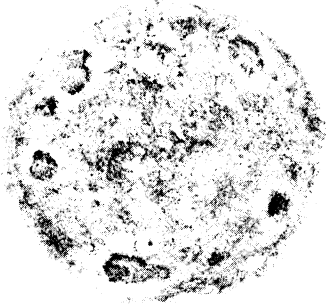
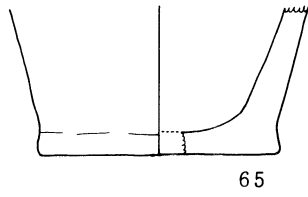
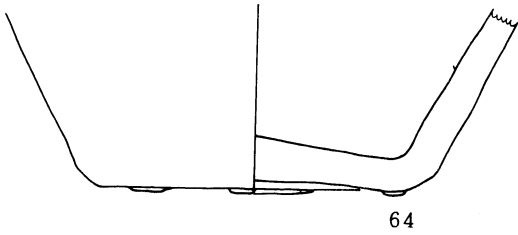
第24図 長浜金久第Ⅱ貝塚・Ⅱ類 (c)



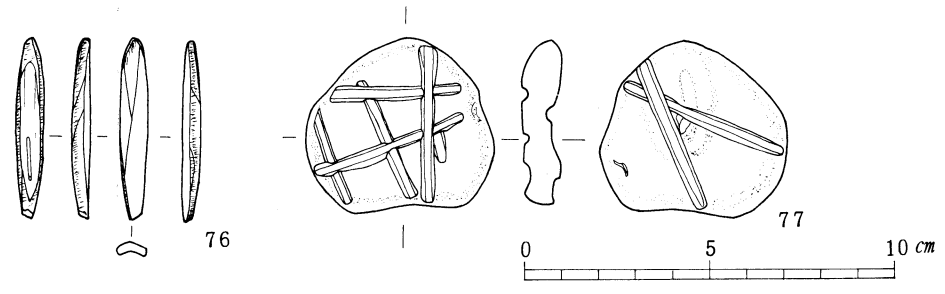
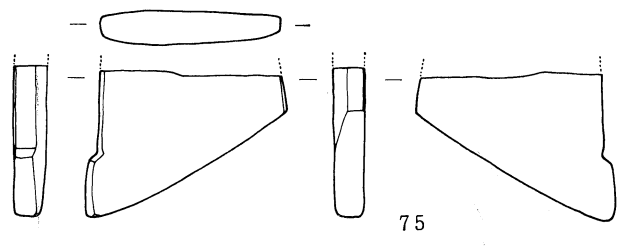
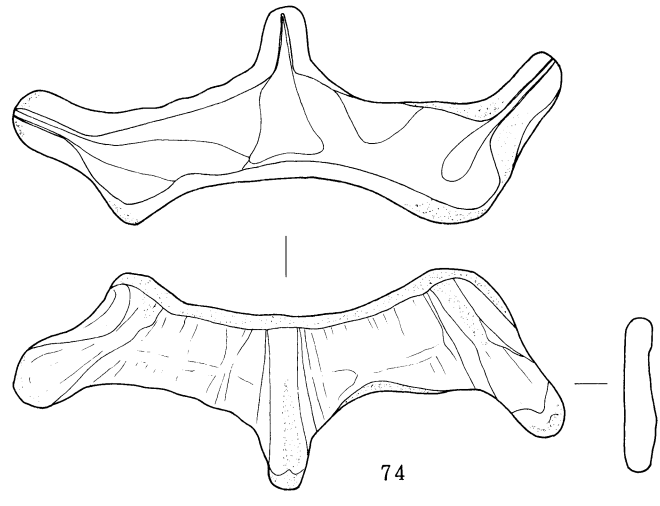
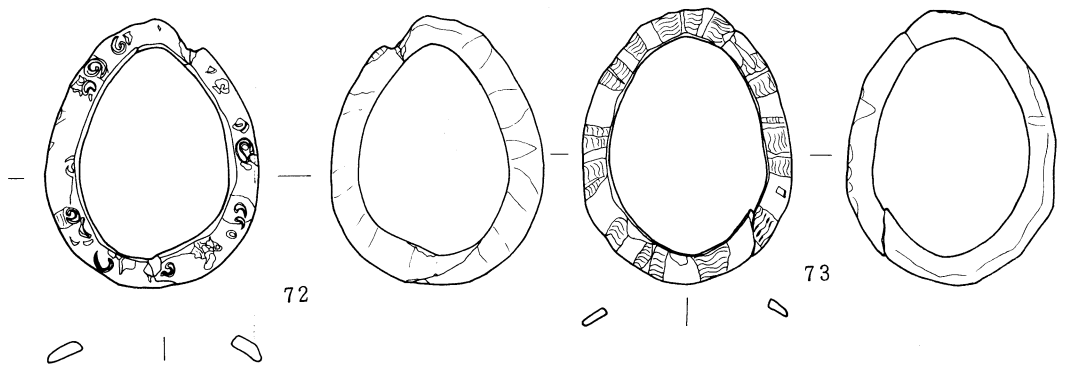
第25図 長浜金久第Ⅱ貝塚・Ⅱ類 (d・e・f)



第26図 長浜金久第Ⅱ貝塚・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅴ類



第27図 長浜金久第Ⅱ貝塚・底部



第28図 長浜金久第Ⅱ貝塚・貝製品・骨製品・石器

第Ⅳ章 小 結

長浜金久遺跡は第1次調査によって2地点で遺跡を確認した。第2次調査ではそれぞれの地点が貝塚であることが判明し、海側を第Ⅰ貝塚、山手側を第Ⅱ貝塚とした。

第Ⅰ貝塚は兼久式土器に伴う貝塚で広範囲に散在し、1回の採集度合がわかる状態の捨て貝が各所にみられる。出土遺物は兼久式土器の甕・壺をはじめ、貝器、貝匙、貝札、貝玉等の貝加工品、鉄製のつりばり、鉄鏃等が出土した。貝殻はマガキガイ、アマオブネ等の小型の貝が多く、他にヤコウガイ、シヤコガイ、クモガイ等大型の貝も出土した。貝塚の半分は砂取りで消滅していたが、今回は1800㎡の調査を行なった。

第Ⅱ貝塚は嘉徳ⅠB式を主とする貝塚であった。ここは竪穴住居跡と貝塚があり生活環境の一端がのぞかれた。また、奄美諸島では縄文期の住居跡の発見例は類例が少なく貴重な1例を加えた。出土遺物は嘉徳ⅠB式が主で、他に嘉徳ⅠA、面縄西洞類似の土器が少量出土している。

なお、第1次調査では上肢・下肢屈曲の埋葬人骨を検出している。この人骨は事業報告では嘉徳期と推定しているが、第2次調査で砂丘の形成が判明し、嘉徳期以後に形成された新砂丘の中にあることから嘉徳期のものではなく、新砂丘期のものと判断できた。

以上のことから長浜金久遺跡は砂丘の発達に伴って遺跡の新旧の位置が異なることが判明した点に特色がある。最後に第1次調査の試掘をもとに慎重に発掘調査を進め、消滅する部分の全面記録を行った。しかし、試掘して確認した範囲以上に遺跡の規模が拡大したので、今回は確認調査した区域の調査にとどめ残部については次年度調査することになっている。

参考文献

宇宿貝塚	笠利町教育委員会	1979
嘉徳遺跡	瀬戸内町教育委員会	1974
ケジ・コビロ・辺留窪遺跡	笠利町教育委員会	1983
萩堂貝塚	松村 瞭	1919



図版20 長浜金久第Ⅱ貝塚の出土状況



図版21 長浜金久第Ⅱ貝塚の住居跡・土坑・炉跡



25



34



29



30



26



33



31



32



35

図版22 長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅰ類 a・b



38

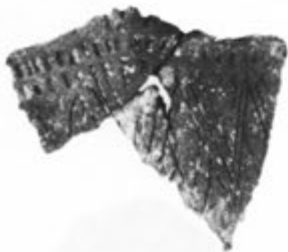


36



37

40



42



39



43

図版23 長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅰ類b・c



52



48



47



54



57



56



59



62



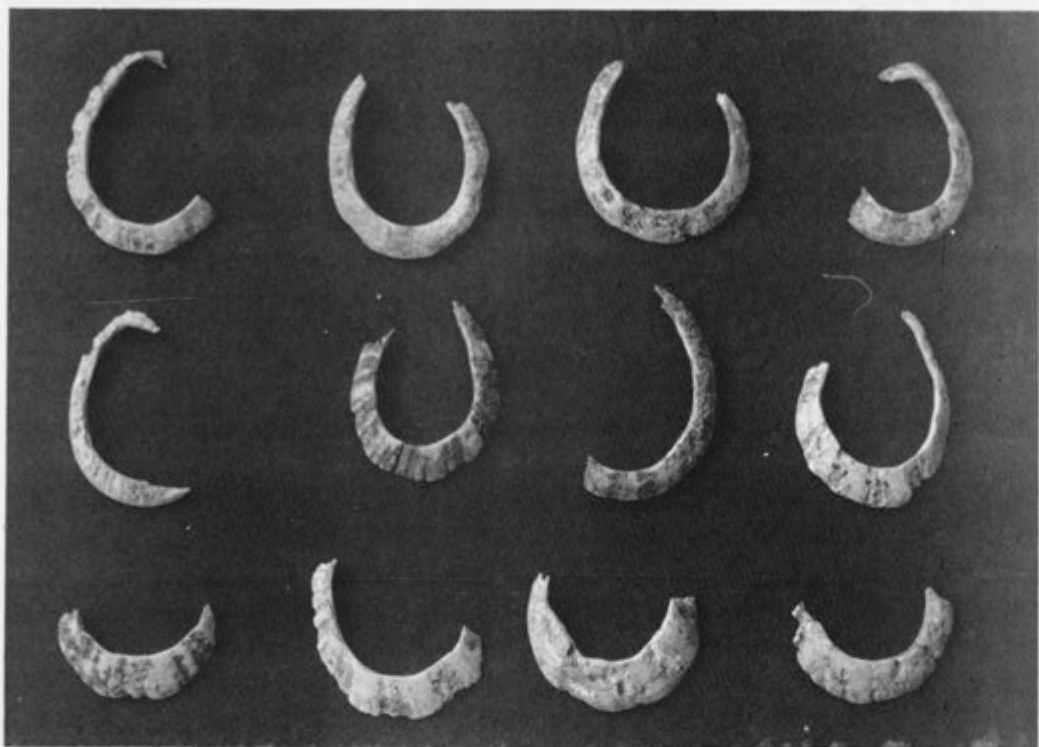
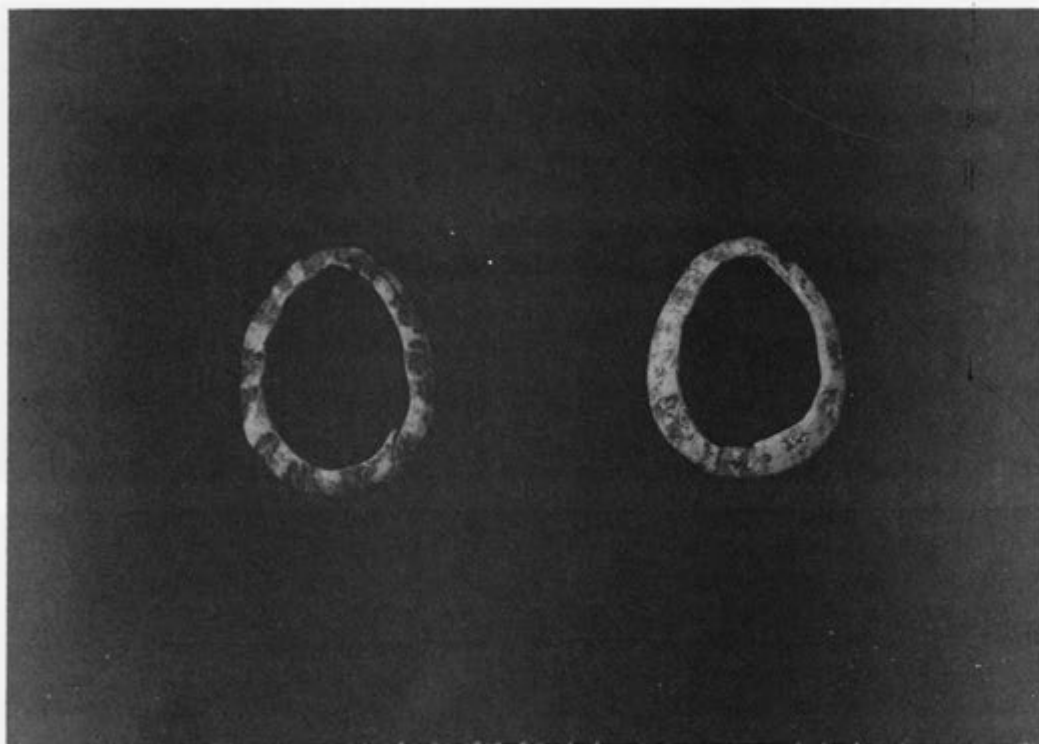
63



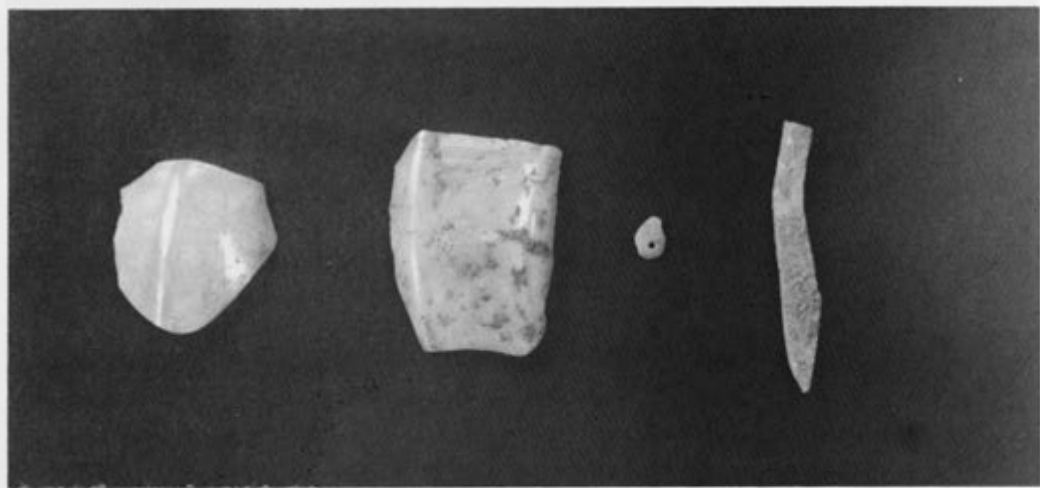
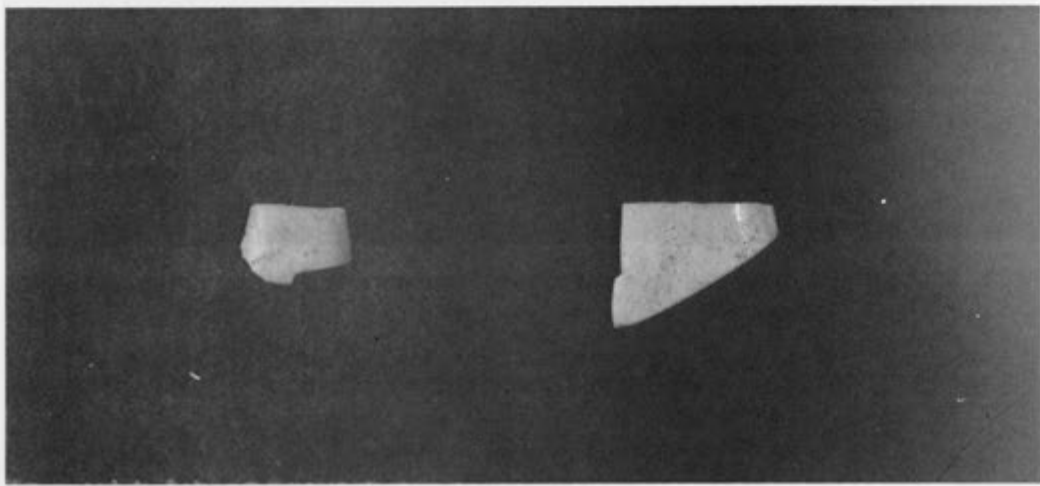
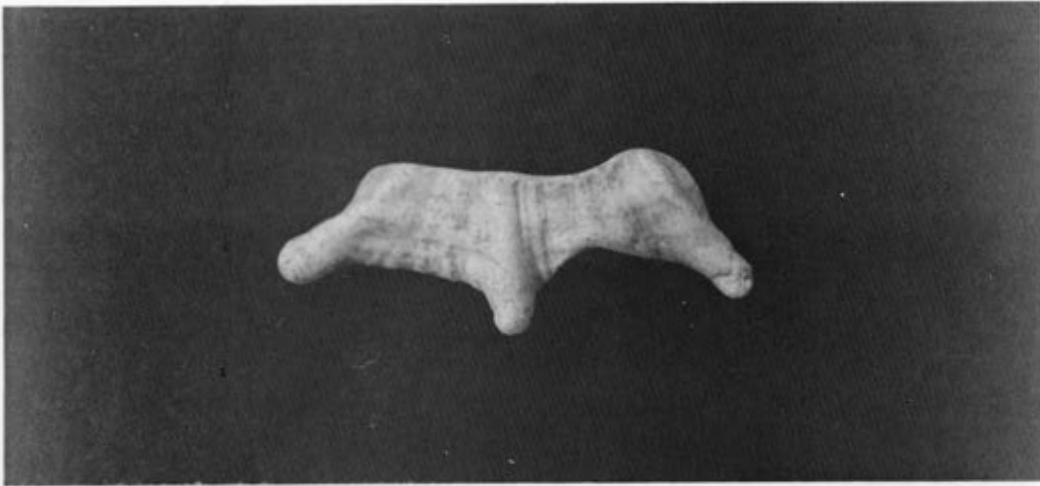
64



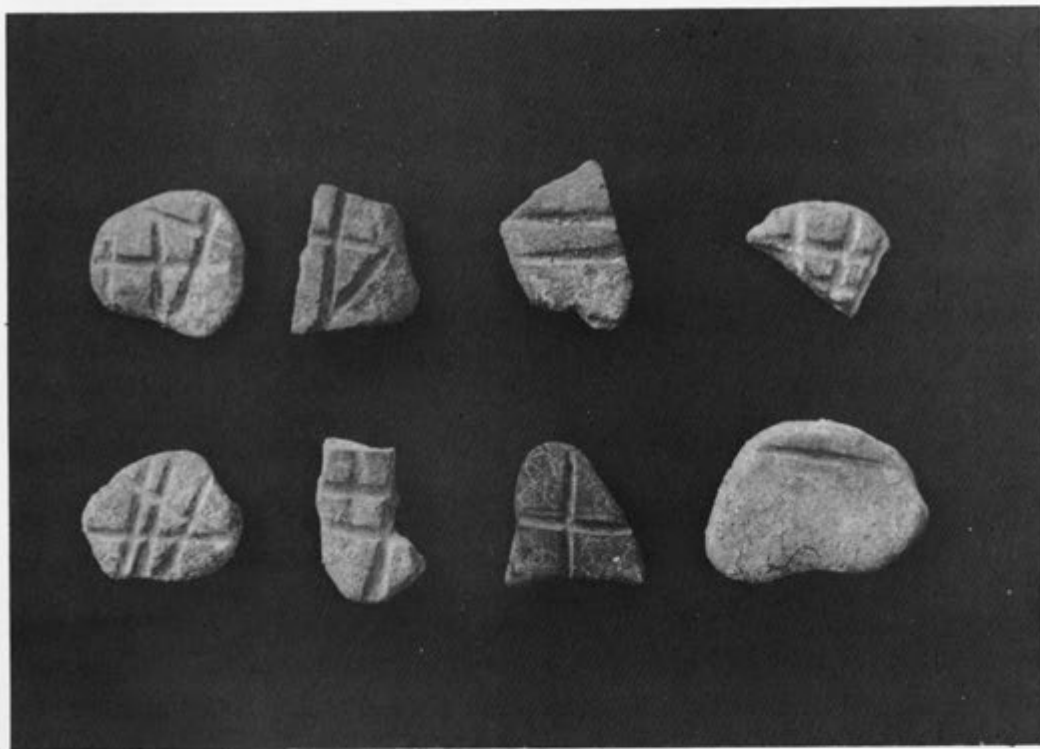
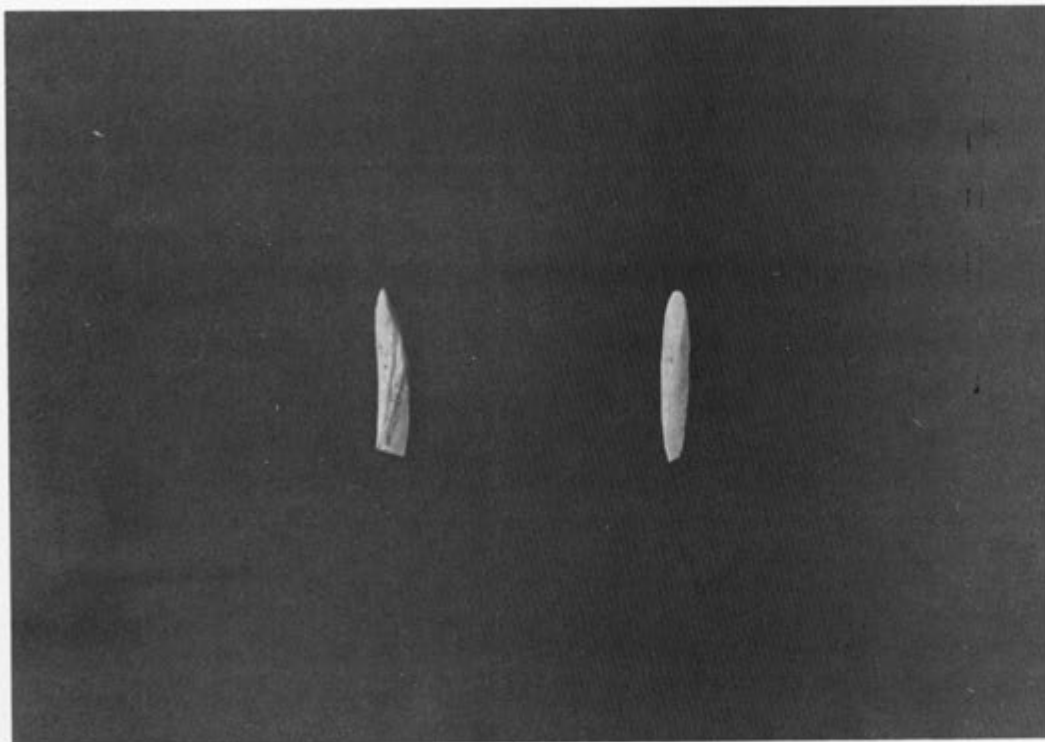
図版24 長浜金久第Ⅱ貝塚Ⅰ類e・f Ⅲ類Ⅳ類Ⅴ類Ⅵ類



図版25 長浜金久第Ⅱ貝塚出土の貝製品



図版26 長浜金久第Ⅱ貝塚出土の貝製品



図版27 長浜金久第Ⅱ貝塚出土の骨製品・石製品

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (31)
新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財調査概報

長 浜 金 久 遺 跡

発行日 昭和59年3月
発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号
印刷所 株式会社 三州印刷
住所 鹿児島市下竜尾町26-1